
「蒼白の月夜」

際限なき戯言の女史(さいじょ)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「蒼白の月夜」

【Nコード】

N5655I

【作者名】

際限なき戯言の女史さいじんなきごころのむすめ

【あらすじ】

私は家族が大好きだった。でもある日を機に家族を捨て、“偽”に縋って生きる人となる。そして、大人になって“それ”は自分が傷つくまいとした卑怯な行為であると知る。

本当の幸せとは、そして本当の家族とは何なんだろうか。

序章

序章

私は悟った。この世に愛情なんて必要ないと。過去を捨て去ってしまった私は、古木のように朽ち果てていけばいい。そう思いながら過ごしてきた。この日までずっと。

私の家族は少し貧しいが、それすら笑い飛ばしてしまえる明るい家庭だった。七歳近く離れた妹と私と母と父の四大家族。世間では不景気と囁かれる中、父は賭博やタバコに一切手を出さずに働き、母も幼い私達を一生懸命に養ってくれた。

家庭熱心な父、良妻賢母な母。そして暖かい家庭。少し貧しかったとしてもやってけるし、不満も言いはしなかった。

「……は将来何になりたいんだ？」

「私は看護婦さんになるよ！！いろんな人の怪我を治してあげるの。」

「そうかそうか。おまえは優しくていい子だなあ。」

父が“私”の頭をくしゃりと撫で、笑顔で言った。

「お父さんも怪我したら治してあげるよ。」

「そうか。じゃあ、今すぐにも治してもらいたいくらいだなあ。」

そんな他愛のない会話。そう言えば小さい頃、私はそんな夢も持ってたっけ。

そして、私ももう十歳近くなった。

あの頃は珍しく宿題も忘れ、居残りをさせられていた。たったひとり、残る教室から見える蒼い月が秋夜に映え、空腹とともに家に帰りたくなった。

「ただいまあー！遅くなってごめんね。」

靴を無造作に脱ぎ捨てて、真つ先に階段を上がり、母のいる台所まで駆けていく。

「あつれー？お母さん帰ってないのかなあ？」

少し寂しくなった。空腹に耐えかねなくなった私は冷蔵庫をまさぐって棒アイスを見つけると、それを啜え、もの寂しく自室に戻った。

「まあ、お父さんも帰るの遅くなりそうだし、弥生と一緒にお留守番でもしてようかな。」

そう思っただけで自室のドアを開けると、目の前に年端もいかない私の妹が立っていた。寂しそうで、弱弱しく、そして不思議そうな声でただ一言そつと言った。

「お父さん、どうして動かないの？」

その一言をぽつりと言って俯く。私は不思議なその一言が理解できず、妹に膝をかがめて視線を合わせ、「どうしたの？」と聞いてみた。

妹は無言で指を指す。その先には私のベッドがあり、布団がもっこりと盛り上がっていた。私は恐る恐る近づくと、布団を一気に剥がし取ってみた。

「おとう……さん？」

父は目を瞑って息もせず、寝ていた。窓から差し込む月明かりが父の頬を青白く映し出す。あまりにも綺麗すぎる寝顔に、私は何故か分からないけれど、顔から血の気が引いていくのを感じていた。

「お父さん、大きな目覚まし時計があれば目を覚ましてくれるかな？」

そんな妹の言葉を聞いて、私は妹を撫でたくなった。妹の髪をゆつくりとくしげるように撫でてやる。自分の心の中で起きている「何か」を理解させる為に、ただゆつくりと撫でてやった。

そう言えば、前に男子がカエルをいじめてるのを見て、一緒に見てたっけ。「死んだとか」そんな事言いながら。私はあの時、何も言えなかった。興味があつたのかも知れないし、分からないけれど。そして、自分の中の「何か」をやっと理解したような気がした。

「そっか。」

そんなことを呟くと、私は唇を血が滲むほど噛み締める。妹が心配そうに上目遣いで見上げてくる。

「どうしたの？」

何故か涙が流れ、笑いたくなつた。

「何も知らなくていいんだよ。何もね。」

私は父にそつと布団をかぶせると、ドアノブに手をかける。妹が不思議そうに立ち尽くしていたので、背中を叩いて急かすように部屋から連れ出すと強引にドアを閉めた。とにかくこの空間にいたくはなかつた。

私と妹はリビングで母の帰りを待った。

そして、小一時間ほどして母が帰宅した。

「ただいまあ。」

「あつ、お母さん帰ってきた!!!」

妹は立ち上がり、待ってましたとばかりに母親のもとへ駆け寄っていく。

「いやー、道路混んでね、買い物行くにも大変だったよ。あれ、

……は帰ってるの？」

「うん。帰ってるよ。おねーちゃん!!!」

妹はリビングに駆けていった。しかし、リビングには誰もいなかった。

「部屋に戻ったのかなあ？」

「まだ帰ってないんじゃないの？」

「いや、帰ってたよ！！」

半ば泣きじゃくって妹は“私”の部屋へ駆けていく。しかし、どこにも人気がない。窓は吹き抜けていて、かすかに風の気配をカーテンが物語っている。

「さて、今日はカレーにでもするか。」

母はエプロンをして、腕まくりをすると野菜を切り始めた。

「たまねぎは弥生が嫌いだから、今日は何としても食べてもらわなくちゃ。」

「おかあさん！！」

そこに血眼になって泣きじゃくった妹が母のエプロンにしがみついてきた。言葉は切れぎれで、ぐしゃぐしゃ濡れてしまったエプロン。その中でかすかに聞こえる声。

「おねーちゃんどこ行っちゃったの……？」

そして、私は家族の前から姿を消した。物心がついて真実を知った妹の姿。悲劇に泣く母の姿。優しかった父の死。その全てを受け入れたくなかったから。

三日は過ごせる衣類、取っておいたお菓子、大好きだったマンガやCD。そして家族の写真とわずかなお金。それらが無造作にリュックサックに詰めると、月明かりの中、闇夜に失踪した……。

第一章「邂逅」

本当に“勢い”で家を出てきてしまった。後悔が後を絶たず、私は人目に付かない路地裏で身を隠して泣いていた。戻りたかった。自分の家に。しかし、この浮かない気持ちばかりが先立って足止めしていた。

翌朝、独り街を歩いてみた。町は人に溢れ、紛れば孤独さえ癒える気がした。しかし、この百万人の中で私と血の繋がっている人はいない。それを考えると寂しかった。

少し大通りに出てみる。路上はヤンキーに溢れ、排ガスのむせ返る臭さが新鮮だ。幾許かゆっくり時間をかけて歩いてみた。すると私に向かってゆっくりと二人の男が歩いてきた。ちよつと間合いが五十センチくらいだろうか。視線を屈めるようにし、窺うように聞いてきた。

「お嬢ちゃん、どこから来たの？一緒に遊ばない？」

おかしい。綺麗な服も身につけてないし、目は淀んで死んだ目をし、表情も浮かない私にどうして声なんか掛けてきたんだろうか。

男たちは囁くように相談をしていた。風のようにかすかに聞こえる声に耳を澄ます。

「俺、実はロリコンなんだ。」

「マジでえー？だから声掛けたんかよ。」

「こいつ、可愛かったし……。」

「大丈夫。『児ポ』も見逃してくれるって。」

私は何故かおぞましいほどの寒気を覚え、下衆な笑いを浮かべている二人から逃げ出したくなり、私は走り出した。

「あ、この野郎、待ちやがれ！！」

怖い、怖い！！あいつら何か怖い！！

息が切れる。膝が笑う。頬は上気し、もう休みたい。しかし、あいつ等は半笑いを浮かべて走って走って追ってくる！！追いつがる！！

「離して！！悪いことはもうしないから。おかあさん！！」

必死すぎて泣き泣き家族の名前を叫んでしまった。もう戻らないし、戻りたいと思っていたあの家にまだ未練が残っていたのか。否、恐怖心からだろうな。

「おとなしくしろ！！」

男は私の手首を青あざが付くほどに強く握りしめる。半ば獲物を捉え、下衆な不敵な笑みを浮かべる。魔女釜の魔女のように笑っている。

「助けてー！！！！」

腹から精いっぱい声を張り上げ、渾身の力で叫んだ。息切れした喉からあふれ出る声が周囲一面に轟いた。

しかし、冷めた目で通行人は我関せず。見ざる、聞かざる、言わざるの三猿状態。もう諦めてこのままどこかに連れて行かれるのも悪くないかなと思ってしまう。それだけ今の私の重い精神を救う術がなかったから。

そうして諦めかけたその時だった。

「やめねーか。」

髑體のシルバーリングをし、サングラスをして、革ジャン、ダメージジーンズを着た今風な格好をした身の丈百八センチはある男が私の手首を掴んだ男に眼を付けている。

「何だよ、お前は。」

もちろんこの立ち回りに相手は納得するはずもなく、颯爽と現れた私の助け人に怒りを燃やす。

「まあまあ、話し合いはこっちでやるっか。小さい子がいる訳だし。」

そういつて、男性は親指で喫茶店の隣にある狭い路地裏を指した。
「喧嘩に自信があるみたいじゃんか。二対一の状況分かって言っているのか？」

男は何故か過剰な自信で、不敵満面の笑みを浮かべる。グラスン越しだから分からなかったけど。

「お嬢さんはそこで待つてな。」

頭を撫でられ、そこでじっと待つことに。

「あれだけ啖呵切ったんだから、こつちから行かせて貰うぜ。」

「ああ、構わないさ。」

頬を殴られ、目を腫らし、顎を殴られて、脳が揺れてまともに立てない。そこに腹を殴って来る。

「こいつ、弱いな。」

「まったく手を出さないぞ。」

あまりにもあつけない悲惨な惨劇。しかし、二人はじわりと腹に来る気持ち悪さを薄々ながら感じていた。ちらりと男を見ると、苦しみながらも勝算を感じているようで、にやりと笑っている。

「こいつ、マゾなのか？」

男たちは「そつちの気」で感じているのかと思っていた。しかし、まったく別ベクトルで事は進んでいたようだ。

「こんな奴殴つても面白くねーな。行こうぜ。」

「お、おう。」

二人は立ち去って行った。大通りには目的の女の子がいる訳でもなく、しけた面をして歩いて行った。

そして、人気の失せた湿っぽい路地裏に取り残された男はゆっくりと立ち上がって服の埃を払い。こう言つてのける。

「俺が『殴られ損』なんて安っぽい仕事する訳ねーだろ。」

私は、ほとぼりが冷めたのを見計らつて、路地裏に覗き込んで男

性の安否を伺う。どうやら生死は問題なさそう。

「おにーさん、大丈夫？目の周り、青あざが酷いけど。」

「大丈夫。この怪我の代償はだいたい五十万ってところか。」

私には、どうしてお金が出てくるのか分かんなかったけど、お兄さんが大丈夫ならいつか。

「うん。助けてくれてありがとう。」

一息ついたのか、私のお腹は重低音を立てて自己主張をした。

「腹減ったろ、飯にしようぜ。」

時は正午にして場所は喫茶店。私は男の奢りで昼食を摂っていた。私は、男に軽く今の素性を話してみた。家出してしまったこと。

大好きな家族に戻れないこと。変える事の出来ない重苦しい空気が雪だるま状に膨らんで重く押し掛かっていく。

「そんな事情があったのか。俺も小さいとき同じ境遇にあったから分かるぜ。」

男は痛めた頬を擦りながら頷いた。そして続けざまにこう言った。

「考え方も人によつてだが、『自分のほとぼり』が冷めるまで辛抱も大事だ。今の状況に身を置くか、それとも家に戻って状況を受け入れるか。それとも逃げの一手を打つか。いろいろ実行してみる……つてもガキには難しい話だな。」

男はメニユーとして頼んだオムライスの中央にスプーンを突き立てると一息ついて、言い切る。

「『策士、決断にして成らず』。俺の高貴なる師の受け売りだ。どんな作戦にも最後は決断が付きものなんだぜ。」

そう言うと、刺していたスプーンでひと掬いオムライスを口に運んだ。私はその言葉を真摯に受け止め、ベーグルを口に含むと、五分たっぷり咀嚼して考える。

「作戦か。」

こんな指標を持って生きている人って強いんだろうな。そう思う

と私は羨ましくなってしまう。誰かに縋る事で「それ」を得ることができればどんなに素晴らしいことか。

「相当重い状況だな。黙ってても答えは見つかんねえぞ。」

男は、ジャケットの胸ポケットから煙草を取り出す。そして啜えて火を点けた。

「まあ、ガキの心は俺には理解できねえ。だが、俺も同じようなもんだ。」

「お兄さんはどうして強いんですか？」

胸に秘めていた事が一気に出てきた。この人には他の人と違う気迫がある。そんな気がしてならなかった。

「言っただじゃねえか。立ち止まっても損だ。俺は世の中の事を『損得勘定』で考えている。楽しいことは単純に得して、悲しかったことはマイナス。しかし、そんな負の感情を背負って生きていればマイナスの付帯。つまり、どんどん気持ちが悪くなって腐るだけさ。だったらずるくてもやる事やらなきゃ。」

男は、単純に考える。と言いきる。そして、口から白い煙を吐き出した。私はその煙にむせると男は「悪い悪い」と言っただけを掻く。

「どうせ、行くとこないんだろ。だったらうちに来るか？二、三日過ぎして帰りゃあいいし。」

その言葉に私は驚愕してしまった。町中であって数分話しただけの男がまさか私を匿ってくれるなんて。今は、身をおける環境があるだけ嬉しかった。

焦り、そして疑念。それらも相俟ったが、こんな気持ちの良い説得してくれる人はいまいと思いなおし、その身を背中に預ける気になっってしまった。

「いいんですか。迷惑しませんか。」

「いいんだよ。おまえの親父代わりにでも慕ってくれればいいし。」

「そうだ、名前は……。」

その一言を言った瞬間、男は表情を曇らす。考え事をしているのはまた違う。しかし明らかに物憂さを感じていた。

「名乗るもんでもないよ。お前だってそうだろ。俺はすべてに気が許せない達。そして、俺にとって情報は命に等しいんだから。」

「何か悪いこと……。」

そう言っただけでも。私も名乗れば言ってくれるだろうか。その口を開くと……。

「いいや、お前の親父代わりだから、『トーさん』とでも名乗るところか。」

「私の名前は……。」

「いいよ。お前も。俺なんか教えなくてもいい。俺とお前が『深入りしない境界線』。それがここだと思っただけがいい。誰彼気い許すな。俺が誰で、どんなヤツであるか。そんな事は分かんねえんだろ。しかし、お前は数分で俺に信用を、その身を委ねてしまった。信用することが損か得か。それをまず自分の『ハラ』で考える。まあ、俺は取って食いはしないがな。」

そう言っただけ、男は軽く笑う。何故か分からないが単純で明るい気迫を纏いながら、それで且つ複雑な心境を持つ彼に少なからず魅了されている私。危ういその魅力に惑わされつつ、私は男に行く末を委ねることにした。

数分歩き、目の前に現れたオンボロアパート。「幸せの家」と書かれていますらしい看板は錆ついて赤茶色になり、アパート全体も見るからにみすばらしい風体。哀愁漂う空気を私は息を呑みながら見ていた。

戸口を後にし、いよいよトーさんの御宅に入る。戸を開けるとむせ返る香水の臭い。散乱するカップ麺の空き容器。そして苔むした畳。それらを察するに私は男性の部屋と言つたものを、身をもって実感した。

「ま、汚いが上がってくれよ。」

トーさんはそう言つて、無造作に床に散らばったマグカップを二つほど拾い、キッチンに向かう。

「トーさんはここに一人で住んでるの？」

「ああ。親父もお袋も若いうちに死んでしまつてさ、今は俺一人なんだ。気楽にやつてるよ。」

「そつか。」

気を紛らわすように外を垣間見、一息ついた。

「ほら、ココアだ。今はこんなしか出せないが、うちに帰ればもつといいもん食えるんだぞ。」

「いや、いや。今は。」

トーさんは気難しい顔をしつつ、恥らしくそつぽを向き、部屋の隅を片付け始めた。

「ま、しばらく居るにしても、きちんと片付けなきゃな。この部屋は流石に客向けじゃなかったか。」

苦笑いしながら周囲に散らばったゴミを袋詰めし、テキパキと掃除機を掛けた。

「私、何かしようか？」

「あ、じゃあ、棚の上雑巾掛けてくれよ。ここ掃除したのもしばらくぶりだよ。」

トーさんは埃にむせながら、はたきを掛ける。そんな健気な姿に不覚にも私は笑つてしまふ。

ずっとこんな日が続けばいいのに。そう思つと気持ちが悪く落ち着かなかつた。

三日が経つた。結論から言つと、私は家に帰る事が出来なかつた。と言つのも、“コト”が大きくなりすぎていたから。

トーさんが寝ている隙を見て荷物をまとめ、外に出た私だったが、家の前に着いたとき、その理想と現実の差に小さな心臓はパンクし

た。

パトカーが家の前に定住し、玄関で母は顔を伏して泣き、妹は母の手に引かれながら、怪訝な顔をして立っている。私は電柱の物陰から見入り、自分がしてしまった“コト”の大きさに頭を抱え込んでしまった。

少し涙を拭いて、私は下唇を噛みしめて、身を翻し、その場を後にした。誰がどう変わってしまったのか。そして、この先自分どう生きていくのか。それを考える気力も湧かず、気の向くままにあのオンボロアパートの前で足を止める。たった一時の優しさが人を変えろという話もよく聞くが、しかし私自身が求めていたのは新たな“依存”と言う形での優しさだった。

また受け入れてくれるだろうかと思いつめ、凄まじいまでに私を悩ませる。その心理が巡り巡って心を焦がしていく。

私はアパートの階段に足を掛け、しばらく考えるかのように立ち止まる。やっぱり良くないか。そう思っただけで引き返そうと、大きく戻りの一步を踏みだした。すると神懸ったのか分からないが、アパートの一室からトーさんが欠伸をしながら出てきた。両手にゴミ袋を持って、これから出しに行こうとしていたところだったようだ。

「あれ、お前帰ってきたのか？」

「うん。行く場所無くて。」

じわりと目尻に熱く込み上げる雫。それを掬っても掬いきれず、止め処なく溢れ落ちる。それと同時に押し寄せる感情の津波。私自身どうしたら良いか分からなくなってしまい、その場に座り込んで泣き出してしまった。

「ちょ、どうした？ま、待て。ちょっと待ってる！！」

戸惑うトーさん。ゴミ袋を急いで片付けると、小走りで部屋に戻って行った。

「ちよつと部屋片付けてくる。そこで待つてな。」

私はここ二分で起きた惨事に呆然とし、立ち尽くしていた。

幾許かし、トーさんは鶏卵一個分入るくらいドアを開け、その隙間から「入ってこいよ。」と言った。

「失礼します。」

そう言つて私は玄関で靴を脱ぎ、トーさんの敷居に足を踏み入れる。三日同じ釜の飯を食つた同志とは思えない自身の不手際さに軽く落ち込んでしまった。

「で、どうしたんだ？ 気まずい事でもあつたのか。」

「いや、別に。」

少し息を呑んで戸惑いを押し殺す。自分がどうあるとか、そんなことは気にしたくなく、幼いながらの罪の重さ、それを身の丈以上に受け止めていた。

その為、私の頭の中は困惑と冷や汗でいっぱい。これ以上問い詰めないでほしいと思つていた。

「ま、俺も切迫した空気はあんまり好きじゃないし、気を楽に持つていこうぜ。あんまり強張ると精神死ぬから。」

そう言つてトーさんはにっこりと笑う。

「言いたい時んなつたら遠慮なく言えよ。」

「ありがとう。」

それから一週間が経つた。

「そういえばお前、学校には行かないのか？」

「うん。」

痛いところを突かれたと身が強張り、ビクンと震えた。

「一応、義務教育である中学校時代までは学校に出とけ。それ以降だつたらどんな生き方しても構わねーから。」

「そうだけど……。」

不安はあつた。父の事、母の事それらを既に知られ、冷やかな陰口をたたかれる。それを考えると蚤の心臓がキュウつと締め付けら

られ、異様に苦しくなった。

トーさんは私の顔を窺うように見る。そして、明らかに行きたくないような素振りを見るや否や、少しばかり考える。親心なのか親と啖呵を切った責任からなのか、ある考えに行き着いた。

「分かった。来い。」

そう言つて、私は手を引かれるままに連れて行かれた。困惑もあつたけれど。

アパートの庭先を出て、少しほど歩いた所に砂利舗装の駐車場があった。フェンスには何の植物も分らない蔦が絡みつき、私の身の丈まで草が生え、全く手入れをしていない。閑静な所にある駐車場。あのアパートの所有地のようだ。

その閑静な駐車場に停められた一台の黒いワンボックスカーの鍵を開け、トーさんは乗るように言った。ドアを開けると軽く清涼感のある芳香剤が薫つた。

トーさんはエンジンを掛け、シートベルトをすると、ジーンズのポケットから携帯式の音楽プレイヤーを取り出してカーステレオに繋いだ。音量を調整し、再生ボタンを押すとまくしたてるような発音の英語がスピーカーから流れ、気分を掻き乱す。トーさんは洋楽が好きなのかな。

しばらく走り、大通りに出るとトーさんは口を開いた。

「これから町外れの学校に行くからな。」

「えっ？」

「言いたくないんだけどさ、家でゴロゴロしたりするのってあんまり良くないだろ。俺は仕事を本分としてる。だが、お前くらいの年には学生だった。だから、仕事をしながら思い返す時が多いんだよ。あの頃は良かったって。そんな事が無かったら将来、つまんない大人になるだけだぞ。」

「いいよ。別にそれでも……トーさんは私が学校でどんな目に遭

「ってもいいと思ってるの？」

私は、トーさんはこんな時、いつも都合のいい御託なんか並べて、こうやって諭している。そうやって馬鹿馬鹿しくいじけてみた。

「バーカ。やらないと分かんないだろうが。」

トーさんは「それ以上は自分で分かれ」と言わんばかりに黙って車を運転していた。トーさんが何故馬鹿にしたのか、その意味に対して少し苛立ちを感じていた。

「ほら、着いたぞ。」

ムスツとし、気は乗らなかつたが、トーさんが急かす為、背中を押されながら無理やり進んでいった。空気が新鮮だった。茂みを縫うようにして進んでいくと、目の前には大きな白い木造の校舎がそびえ立っていた。

「きれっー！」

思わず見とれてしまい、自身の語彙を低下させるほどの美しさであった。物憂げのあった自分の心が小さく見え、馬鹿馬鹿しくなってきた。トーさんは嬉しそうに校舎の三角屋根の時計台を見つめる。

「ここは俺の母校なんだ。一身上の都合があつたとしてもここならやっていける。和気あいあい、楽しくやってけばいいさ。」

遠い目で見つめるようにノスタルジックな気分浸っていた。しかし、私はそれどころじゃない。はち切れんばかりの好奇心でトーさんの手を引っ張って中に入れていこうとする。

「早く行こうよ。中もどうなってるか興味あるしさ。」

「待って。焦らなくても学校は逃げないから。」

トーさんはやれやれと言って、ゆっくりと校舎に足を踏み入れた。

時は過ぎ、私達は広い応接間のソファアに座っていた。

「……………そうですか。で、ここに来たと。」

私の正面にいる白髪交じりのおおよそ五十年代後半の男性。物腰は柔らかく、表情も柔和で優しそうな印象にあつた。

「はい、だから俺としてはこの風当たりの優しいこの学園に彼女を入れて下されば、御校の将来の安定も望めると思っています。」

「しかし、言いたい事は分かるんですが、この学園の転入試験は相当難しいですよ。」

「ええっ!」

思わず私は驚いてしまった。

「いえ、問題なく。私が何とか指導しますから。」

「でも、歴代成績優秀な貴方がおっしゃったとしても私は彼女の事についてあまり知らない訳ですしその自信と根拠はどこから湧いて来るものなのですか?」

「秘密です。俺が何とかします。」

この人は大丈夫だろうか。私はトーさんの顔をちらりと見た。トーさんは眉を、口元を一切動かさず、自信満面の顔をして男性の顔を見ていた。

「まあ、そこまで言うなら信じてみますか。ではこの書類を××日までに郵送お願いします。」

「分かりました。」

それからトーさんは、家に帰ると散らかった自室の書類の山から五年近く前の黄ばんだドリルと、あの学校の過去問を引っ張り出してきた。

「ほら、策は無いんだ。とにかく、血の滲むような勉強をして、自分の居場所を手に入れるんだ。一日でも早く、一日でも人生を無駄にしちゃいけない。」

私は、今まで以上に真剣なトーさんの表情を見て。私以上に真剣そうなトーさんを見ると、自然にやろうと思う気持ちが沸いてくるのだった。

トーさんは一日八時間、休憩を挟みながら五教科勉強を私に教えてくれた。いつもは優しいトーさんもこの時は険しい表情で厳しい

口ぶりをしている。しかし、一言一言に骨があり、トーさんの教育は私の頭にするすると入って行った。

トーさんの教え方は凄いと誉めれば、トーさんは私自身に理解力があるからだと言遜をしていた。

ある日、勉強中にトーさんの指を見る事があった。指先にペンダコやささくれができ、酷く傷だらけだった。その日の夜、私はトイレに起き、いつもは消えているトーさんの書斎の明かりがついている事に気づく。ドアの鍵穴から垣間見ると、机に齧りつくように勉強をしているトーさんがいて、あれでもない

、これでもない私の答案とドリルを照らし合わせながら、問題と格闘しているトーさんの姿があった。中学校の勉強を教える為に、思い出す為に毎日遅くまで必死にやっているトーさん。それを考えたら涙が溢れてきた。

そして、トーさんは五日私にみっちり勉強を教えると、一日は完全に眠るという無理なスタイルを続けていった。

私の為に何故そこまで思うこともあった。トーさんに無理しないでとも言った。しかし、トーさんはそれを拒み、私に勉強を教えてください。

私とトーさん、二人の努力の甲斐あってか、一ヶ月後の転入試験には見事受かる事が出来た。合格通知を見たトーさんの嬉しそうな表情は生涯忘れる事が出来ない。

そして、季節は冬になる。

「ふう、寒いな。今日は鍋にするか。材料は何にする？」

「白菜がいいな。ウインナーも入れようよ。」

「そうだな。でも、二人で食べきれぬ量にしようか。」

思えばトーさんと会って三ヶ月間色々な事があつた。私にとって忘れる事が出来ない事もあつた。そして、トーさんの色々な顔も見えてきた。

いつも私に優しくしてくれるトーさん。もつとトーさんを知りたい。そう思つても近づく事が出来ない。手の届きそうに届かないあの大きな月のように、私とトーさんはこれほどまでに割り切つてしまっているのか。お互い踏み入る事の出来ない物があると思うと苦しくて胸が詰まりそうになつた。

「どうした？具合でも悪いのか？」

トーさんは私の顔を覗き込むと不思議そうに思つて、私の額に手を当てた。

手を当てられ、はつと我に返り、私はトーさんに自らの無事を告げる。

車に乗る。トーさんは冬らしい曲でも掛けようかとカーステレオを弄り、曲を掛けた。外を見れば雪がちらちらと舞い始める。

「ねえ、トーさん、私たち会つて三カ月経つたよね。」

「早いもんだよねあ。」

外の雪に合わせて車内の時間もゆっくりと流れる。トーさんはハンドルを切りながら、冬用タイヤに換え忘れた、とぼやき、そんなトーさんの一言をボーッと聞いていた。

学校では友達が出来た。親友の千鶴。成績は優秀のお金持ちで、何一つ欠点が無い性格でありながら、物腰が柔らかく、頭も低い。いわゆる優しいお嬢様。私は彼女と陰と陽の関係で引き合つた一人の他人でしかない。でも色々なことを話し合つて、今ではトーさんの次に掛け替えのない人になつてゐるかな。

もう一人はサイトウくん。お調子者でクラスのムードメーカー。でも、話の途中で考え込む癖がある妙な男の子である。

「次の月曜、授業参観があります。その後親御さんとあなた達の高校受験について話し合う予定です。必ず親御さんに話をしておいして下さい。」

放課後のホームルームで若い女の先生がそう言った。

「冬の授業参観か。私のお父様来て下さるかしら。でも、毎日ビジネスで忙しそうだし。」

千鶴はそんな事を言っている。お母さんと嫌な別れ方をしている私には、言う資格無いかも知れない。でも、親の事で悩めるなんて羨ましいな。と正直に思った。

「そう言えば、貴方のご両親はどちらが来て下さるの？」

「えっ、……まあ、お父さんかな。」

急に振られた質問に対し、戸惑いながらそう答えてしまう私。しかし、パツと浮かんだトーさんはここんとこ忙しそうだし、来てくれるだろうか。そして、血の繋がらない私の為に「親として」参加してくれるだろうか。

そう思ったら不安に苛まれる。

「貴方のお父様、どんな方が気になりますわ。私としても挨拶をしておかなくてはなりませんね。」

そう言っただけ千鶴は挨拶をして席を外した。

「お父さんか。」

私に重苦しく課題が押し掛かる。

帰りは、トーさんの迎えは呼ばず、電車で帰る事にした。一歩一歩の足取りは重く、帰るまで色んな事を考えてしまった。

「ただいま。」

「おつ、帰ったか。今日はさ、帰る途中面白そうなパソコンゲームあったから買ってきたんだ。一緒にやるうぜ。」
私と打って変わって明るいトーさん。私は考えていた事を思い切っ
って言う事にした。

「あのさ、トーさん、お願いがあるんだけど。」

「ん？どした？」

「私の授業参観来て欲しいんだ。」

一息で言い切った。私にとって「トーさん」は「父さん」ではない。肉親がいようと、どんな形の愛情があろうとも、来て欲しいのはトーさんで、トーさん以外はあり得ない。そう思っ
て言いだせる一言だった。

トーさんは少し考える。

「まあ、大した事無いんだろ。予定も入って無いし、行ってやるよ。」

「えっ、あ、ありがとう。」

思い詰めていた事よりも軽くて拍子抜けしてしまった。私は思わず嬉しくなっ
て涙を流してしまう。

「おいおい、泣くなって。ホントお前はよく泣くよな。そんなに俺に来て欲しかったのか？」

「うん、うん、うん……。」

私は、ずっと返事と涙を止める事が出来なかった。

月曜日。

「この数式は $X=1$ となる訳ですね。」

先生が説明をしている。私はノートを取りながら時々後ろを見る。そろそろと親が来て後ろから我が子の様子を見守る。クラスメイト達はあれはうちの親だと興奮し、きゃいきゃいと騒ぎながら、片や

必死にノートを取りながら、それぞれ様々な形式で授業を受けていた。

「あれ、千鶴さんのお母さんだよ。」

ツンツンと後ろの女の子からシャープペンで背中をつつかれ、指差された後ろを振り向くといかにも和風美人と言った女性が立っていた。私はお金持ちの方は、ブランド物で着飾るような、見せつけるような豹柄に身を包んでいるような、一般には及ばないような雰囲気醸し出している者だと思っていたが、この女性には「清楚」と言う言葉が最も似つかわしい人だった。私がこうして千鶴に話しかけられているのも、頷ける気がした。

「私の……お父さん来ないなあ。」

そんな事を考えていた。

来ない。まだ来ない。私の中では焦りと不安でいっぱい、しょっぱい気持ちで、千鶴にはああ言ってしまったが、それ以上にトーさんの言葉を信じていたからこそ痛く辛いものがあり、私は期待していた。裏切つて欲しくなかった。

そうして残りの授業時間が十分に差し掛けた時、教室のドアが勢いよく開き、トーさんが息を切らしながら入ってきた。

「トーさん!!」

私は思わず立ち上がって声を上げてしまう。

「悪い、待たせたな。」

トーさんはバツの悪そうな顔をし、私を待たせた事を何度も謝っている。周囲の視線が私に集まり、流石に私は今の状況を収めて、そして席に着いた。流石に熱い親子だと周囲は思ってしまったのだろうか。

授業が終了し、千鶴は母親を見送った後、私の元に来た。

「貴方のお父様、なかなか若い感じがしたね。しかも元氣そうですね。」

「そう?」

「はい。似てらっしゃらないと言っか、お母様、再婚でもされたの?」

「まあ、そんな感じかな。」

少し焦りながらそう答えた。

放課後。

「トーさんの所行かないと。待ってるだろうな。」

進路相談も終わり、私は荷物を纏めながら思い出すようにトーさんの事を言った。教室には私ともう一人以外ほとんど帰ってしていない。

「なあ、お前って今幸せなのか?」

唐突に言われ、振り向くとサイトウくんが離れた席の机に座りながら喋っていた。

「まあ、言われるまで考える事無かったけど、昔より充実しているよ。」

「ふーん。じゃあ、その幸せ、いつまで続くか考えてみたりする?」

「うーん、まあ、あんまり考えたくないし、自分が不幸になるとか考えてたらやってけないと思うな。」

私はこの時、トーさんに言われた珠玉の如き一言一言を思い出していた。

「そっか。俺はあんまり上手い事言えないが、お前が時々神妙な顔つきするから、不幸になるのが怖いとか、今の生活に満足してないとか、そんなころ思ってしまったよ。ま、それならいいんだ。」

サイトウくんは頭の後ろに手を組み、部活あるからと一言だけ言
って教室を出て行った。

「幸せ……か。」

私が不幸？私が幸せ？なによそれは。サイトウくんに言われた一
言一言を消化し、反芻する度、苛立ちが止まらない。

「なによ、アイツは。」

私は椅子を蹴り飛ばす。そして、「自分らしくない行動」に気づ
いて椅子を戻した。

「まあ、いつか。トーさん迎えにいこ。」

トーさんはちょうど今、話が終わった所だった。

「じゃあ、お父さんと気を付けて帰るんだよ。」

先生はそう言っ、私は先生に挨拶をしてトーさんの手を引きな
がら帰る事にした。

「なあ、お前さんは高校に行きたいか？」

トーさんは帰る途中不意にそう言う。

「まあ、トーさんが迷惑しないのなら。」

「そうか。」

「トーさんは先生と何話してきたの？」

「まあ、成績の話とか、学校内でのお前さんの事とかね。成績も
頑張っ、て上位に入っ、てるし、友人関係も上手くやれてるみたいじゃ
なか。」

「まあね。トーさんが入れてくれたからだよ。」

私はトーさんに感謝してもし切れない。そんな気持ち胸の中に
秘めていた。幸せとか、幸せじゃないとか、今の状況でその事は考
えちゃ駄目だ。一秒、一日でも多くトーさんと過ごしたい。

「頑張っ、て高校入るぞ。」

「うん。」

トーさんはアクセルを踏み、少しスピードを上げた。車窓から見える夕日が美しかった。

それから私はトーさんの指導の元高校受験に挑んだ。仕事の関係上、トーさんは前よりも時間を割く事が出来なかったが、私は、以上に自主的に勉強を進めて行った。

そして長い冬が過ぎ、高校生となる。

「いよいよ高校生だな。よく頑張った。この時期、俺はどれだけ恋愛に悩んできたかと思うと懐かしくてしょうがないよ。」

感極まるトーさん。柄にも無く、目尻を潤ませる。

「トーさん、私は大丈夫だよ。前向き。トーさん、これからも頑張ろう。」

しどろもどろ。言葉にもならないアドバイス。トーさんにかかる言葉がうまく見つからず、ただただ自らの無事と幸先の事を告げる私。

「まあ、学生も悪くないだろ。頑張つて来い。」

「うん。」

背中を押され、桜の中私は高校生活を始めた。そして月日がゆっくり流れ去った……。

思えば私の家族はどうしているんだろうか。

第二章「姉妹」

お父さんの死が過ぎ、五年が経ちました。お姉ちゃん元気ですか？ ボクは元気です。お母さんは、お姉ちゃんが居なくなっただけから何度も幾度となく泣き崩れる事がありました。しかし、ボクはお母さんの手を取って何度も何度も励まし、その度私の逞しさは父譲りのものだとお母さんは言っていました。

悲しかったけれど、お母さんにはボクが付いていなきゃと思う一心でボクは、弥生は遅く成長したつもりです。

あの日の悲しい気持ちは痛いほど分かります。でも、お姉ちゃんには帰ってきてほしいと願うばかりです。

「おねーちゃん、どうしてるかな。」

弥生は窓から星を見上げ、ずっと姉の事を思っていた。長く過去の事を思い出す。

「今どうやって過ごしているかな。おねーちゃんはもう大学生かきつと綺麗になっているだろうな。」

離れて輝く星同士のように、いつかは分かり合いたい光がある。

弥生にとって織姫と彦星のような存在、それが姉であり、それ以外は無い。

そして、今は遠く無き姉に健気に思いを馳せるが、弥生は考えても無駄だと思い、止める事にした。

「心の片隅にはいつも生きてるんだ。でも五年経ったんだし、おねーちゃんは居ないよね。うん。あんまり考えちゃ駄目。お母さんも悲しむし、ボクはボクとしていかないと。」

弥生は俯き、少し寂しいと思う。しかし、思いを立て直すとベットに入って大好きなデューベアを抱きながら眠りについた。

朝。

「へくちっ！」

可愛らしいくしゃみと共に弥生は眼を覚ました。

「あれ、ボク、机で寝てたみたいだ。うう、寒い。」

セーターに暖房を利かせた部屋。しかし、朝日が差し込むと冷たくなった机と書き途中の日記帳。それが物寂しく残されていた。救いだったのは少し厚着をしていた事か。

弥生は眠そうに眼を擦る。目尻には塩辛い泣き跡が一筋、昨日の軌跡をなぞるように現れていた。

「あれ、ボク、夢の中で泣いてたのかな。」

鏡を見ると重く腫れぼったいような二重の瞼。充血した瞳。

「どうしてだろ。ま、取りあえず顔洗わないと、こんな顔じゃ学校には行けないな。」

そう言っただけ引き出しの中から洗顔料を出した。その時、弥生は古びた本に目が留まり、一緒に暗闇から引き出してやる事にした。

「あー、懐かしい。ボクの好きだったポエム集だ。一時は趣味で詩を書こうとしたんだけど、文才の無さに幻滅して、すっかり忘れてたんだ。少し背伸びして大人になろうとした恋の事、幸せな詩、そんな事が書いてあったな。」

パラパラとノートをめくっていく。ほとんど目もくれない自分の赤裸々な過去だった為。しかし、一節だけ目に留まる詩があった。

飛べナイ天使

ある所に飛べナイ天使がいました。

片羽根をもがれ、天に飛び立つ事が出来ない天使。

飛べナイ天使、唄ウ。悲シミヲ、苦シミヲ。

大声デ、泣ク。泣キナガラ、唄ウ。

そして泣き疲れた、飛べナイ天使。

片羽根は地に、灰に消えて、喉は焼けつく痛み。
泣きじやくつても天に手が届かない。

声八、天ニ響イタ。声八、天ヲ鉛色ニ染メ、澱ンダ雲、雨ヲ降ラス。

ある日、その天使の悲しみを分かってあげたいもう一人の天使がいました。

いつも天界の窓から見つめるその悲しげな姿、唄声は綺麗なのに、決して救わぬ、明るく晴れないその唄。

窓カラ天使、飛び出シタ。ズブ濡レナソノ天使ヲ、傘ニ入レル。
シカシ、飛ベナイ天使、ソノ天使、分カルマイソノ気持チ、ソツポヲ向イテ訴エル。

「じゃあ、私が片羽根になろう。」
天使は片羽根をもぎました。痛みを堪えて。飛ベナイ天使はその姿を見て、伝わってくる痛みと驚きに心臓が止まりそうになりました。

「やめてよ、あなたも飛べなくなるでしょう。」
天使、苦ク笑イナガラ、飛ベナイ天使二手ヲ差シ出ス。
「片羽根が無いのなら、肩を貸せばいい。」

失ツタ羽根、左右対称ニナリ、必死ニ天使、羽バタク。
二人ノ重ミ、決シテ飛ブコトカナワズ。

しかし、天使は諦めませんでした。痛みを耐えながら残された羽根で羽ばたきました。その姿を見て飛ベナイ天使も羽根を羽ばたかせました。

フワットーメートル。タツタソレダケ。シカシ、飛ベナイ天使、久

シク地カラ足ヲ離ス。

「ほら、飛べるじゃないか。」

天使ハ笑ツタ。飛ベナイ天使、小サク、嬉シソウニ微笑ンダ。

「この詩、おねーちゃんとボクみたいだったなあ。小さい頃いつも先立って色んな事を教えてくれたおねーちゃん。片羽根しかないけれど」

弥生は顔を洗う前にポーッと寝起きの悪い頭で物思いにふけた。瞼が重く、店の閉店を告げようとしたその時だった。

「やよいーっ!!!まだ下りて来ないのーっ!!!」

「やべっ。」

ハツと我に返り、急いで顔を洗って下の階へ降りて行った。

朝食。

今日はガーリックトーストとオニオンスープかあ。

「玉ねぎ嫌いなんだけど。お母さん。」

「残しちゃ駄目よ。せつかく作ったんだから。」

お母さんは洋食料理が得意で、良くおやつに紅茶とスコーンの取り合わせを持つてくる。しかし、今日の朝食。ボクの嫌いな玉ねぎと朝の天敵ニンニクだよ。カツコよく「garlic」なんて言わなくてもいいのにね。相変わらずヘヴィーな組み合わせだよ。全く。弥生は文句を言いながらガーリックトーストを口に含んだ。そして、オニオンスープのカップを嫌そうな顔をしながら口元まで近づけた。

玉ねぎか。匂いが嫌いなんだよね。小さい頃から嫌いだったし。

嫌いになれば生活から離れていくから忘れるのは容易い。玉ねぎだつてずっと食べなければいつの間にか頭の中から消えていくからね。

でも、玉ねぎは忘れられても、おねーちゃんを忘れられないのはどうしてなんだろう。ずっと寂しかった。ずっと一人だった。だから嫌いになりかけたし、嫌いにもなった。でも、心の隅では会いたくて、その感情があるから忘れられないのかな。残されたのはクマのアカさんだけだし。

「弥生、ほれ、手が止まってるよ。友達迎えに来るんでしょ。早く食べないと。」

また母の声で我に返る弥生。

「今日のボク、なんかおかしいな。憑かれてるんだろうか。」

「何言ってるの。早く食べないと片付けちゃうよ。」

「あー、待って。」

焦る弥生。それと同時に弥生をもっと焦らせる軽快な間延びのいい音が家の中に鳴り響いた。

「はいはい。」

母は、先程の一割増しのスピードで玄関まで向かい、弥生は残されたオニオンスープをじーっと睨みつけながらため息を吐いていた。

「やよい、おはよっ！……え、何してるの？」

弥生の友人はリビングに入るや否や軽く硬直した。

「いや、この悪魔を流そうと思って。」

流しにつま先立ちになって、コップを傾ける弥生。オニオンスープの中のクルトンが血の如く、鈍い音を立ててシンクに落ちていく。見られてしまった罪悪感と共に、玄関から忍び寄るひたひたと湿った足音が弥生の背筋を震わせた。

「MA・ZU・I。」

ゆっくりと忍び足で流しから下がるうとした弥生。しかし、悪魔の創生主である魔王は弥生の惨事をいち早く目撃し、叱咤をかました。

「や・よ・い、今何をしようとしていたの？」

「いや、味濃いから薄めようと思って。」

「どうせ流しに捨てて、学校に行こうとしてたんでしょ。」

「違うよー。」

「じゃあ、そのシンのクルトンは何？」

「えーつと……その……。」

母の尋問に居たたまれなくなった友人は固く閉ざしていた口を開いて、一言だけ言った。

「あー……捨てようとしてましたよ。」

「行ってきまーす!!!!」

母の怒号が響く前に弥生は素早くカップを流しに置き、友人の手を強引に引つ張って母の脇をすり抜けて玄関を飛び出して行った。

「こらっ、玉ねぎは残しちゃ駄目だって……言ったじゃな……い。」

残された母は目の前に弥生が居ない事に気づき、一瞬啞然とした後、手元にあつたオニオンスープを一口飲んだ。

「こんなに美味しいのにどうして残すのかなあ。」

「ねー、何で千夏はお母さんの肩持ったの？」

友人はくすくすと笑いながら言った。

「う、く、い、いや、何となくだよ、何となく。」

そう言いながら弥生を背後から羽交い絞めにし、脇腹をくすぐり出した。

「あの、言ってる事と矛盾してないかい？」

「お前さんはもう死んでいる。『チナツ千烈拳』!!!」

「やめろー。何するんだよう。」

「弥生さんはホント可愛いな。まるで絵本から飛び出してきた『森のくまさん』だ。」

千夏は弥生を苛めながら悦に浸る。新手の百合小説を思わせるような手慣れた千夏の手付きは、弥生を相当苛めて来た物だとも見て取れそうだ。

「やめろー、怒るぞー。」

「怒ってみろよー。弥生たんが怒っても猫一匹逃げた事が無いじゃないか。むしろ和む。」

千夏はにまにまと笑いながら、両手を上の方に持って行った。

「さつて、成長してるかにゃー。」

猫声も混じらせ、弥生の胸を揉む。明らかやりたい放題だ。しかし、非力な弥生は抗う事敵わず。

「うう、ボクの初めてが。」

えぐえぐと目を潤ませ、洪水を起こそうとした。

「うう。流石にやり過ぎたか。」

千夏は弥生から素早く手を離し、後ろに隠した後、五十センチほど立ち退く。そして、宥めるように弥生の頭をゆっくりと撫でた。

「悪かったつて。ごめんよー。」

「ホントかなー。ボクはC社が最近出したホットレモネード飲みたいと思ってるんだけど。」

千夏がちらりと左を見ると、タイミング良く、C社の自動販売機があった。

「えー、値段は？」

普通の缶ジュース相場が百二十円なのに対し、百五十円と言う破格値だった。千夏は苦笑いし、財布をちらりと見て、五百円硬貨が一枚。使ってくれ、と中から小さく自己主張していた。

「今月使い過ぎたからなー。」

その五百円硬貨を摘み上げると、自動販売機に押し込んだ。半ば戦場に兵士を送り込むような気持ちで。

そして、千夏は激しく殴る様にホットレモネードのボタンを押した。心では「大砲発射！！」とか言っていたかも知れない。

ガタンと無機質な音を立て、ホットレモネードが撃墜。その生温かい缶をゆっくりと弥生に献上致す。

「あ、ありがとう。」

弥生は缶を頬に付け、伝わる熱を味わいながら、微笑んでいる。

「幸せそうな奴だ。」

千夏は血の涙を流しながらその様子を見守っていた。

学校につき、千夏と弥生は花瓶を換え、黒板にチヨークをセツトし、日直である責務を果たした。そして、友人たちがぞろぞろと学校に来る。

「あー、おはよ、弥生。」

「おはよーっす。」

「おーっす、ユキじゃないか。」

弥生の後ろからぬっと現れるように千夏が顔を出して挨拶した。

「今日は二人とも日直？」

「そだよー。」

「あー、もうやってらんないわ。朝からいろいろやんなきゃならないし。」

弥生は気の抜けた答えを、千夏はやる気の無さを主張し、髪の毛を大胆に掻き上げる。

「でも、弥生たんがいれば大丈夫かなー。」

「げっ。」

弥生は何かを察したように千夏から軽く離れる。

「ちっ、朝経験済みだから反応が早いわね、せっかく、もちゃもちゃしてあげようと思ったのに。」

「だーかーらー、それ駄目なんだって。あー、今日は何で千夏と日直なんだろう。」

「ひどい、そんな言い方するのっ!!」

千夏は目元に手を当てると声をひくつかせて泣きだした。

「あー、ウソだって。ウソウソ。千夏とやって良かったと思ってるよ。ボクは千夏とやれて幸せだよ。」

弥生はバツが悪そうに、ぶっきら棒に、投げやりな言い方をした。しかし、千夏は泣きやむ様子を見せない。

「もっかい。」

「あー、もう千夏、元気出してよ。」

「えぐっ、さっきなんて言ったのっ。ひくっ、聞こえなかったんだけど。」

「だからさ、千夏の事ないがしろにして悪かったって。ボクは千夏の事大好きだからね。」

弥生は恥じらいながら言い、そっぽを向いた。

「く、くくく、ぷぷぷ……。」

「ん？どしたの？」

「あー、もう駄目だ、弥生さんにこんな事言われたら私、一生お嫁に行けないわ。」

千夏は腹を抱えて大笑い。泣いていたのは嘘だったみたいで。

「凶つたな。」

更に千夏はユキにこう言った。

「ユキ、ちゃんと録れてる？」

「うん。」

ユキの手には音を集音して再生する、サラリーマンが会議でよく使う、いわゆるボイスレコーダーという代物があった。

「やめるー、ボクを辱める気がっ。」

弥生はあわあわとしながら、ユキの周りをうろつろ。ボイスレコーダーを奪おうと必死だ。しかし、小柄な弥生が長身のユキからこれを奪うのは至難の業だろう。

「ユキ、パス。」

千夏はユキからボイスレコーダーを受け取る。

「さて、うまく録れてるかなー。」

千夏は右サイドについている再生ボタンを押した。

「ザーザー……ボクは、ち、の事大好きだからね。」

「んー、少し音が悪いなー。」

「くっ……返せっ……！」

迫り来る弥生の猛攻を交わしながら、千夏は再び再生ボタンを押

した。

「サー……ボ、は千夏の事、……好きだからね。」

絶え間なく流れる収録音。千夏は世間で言う「悪女」と言う奴かも知れない。

「やー、これは永久保存しとくしかないわ。」

「だから返せって。」

ボイスレコーダーを持った千夏を追いかける弥生。その姿を見てユキは平和な一日になると確信した。

そして、朝のホームルーム。

「えー、お前らはもう中学生だ。将来の夢が決まってる奴がいるかも知れないし、いないかも知れない。そんなお前らに来週は職業体験があるんだ。どこに行きたいか親御さんでもいいし、自分で決めるのもいい。あー、だから、早めに行きたいと決めておくように。連絡は以上だ。」

「起立、礼、着席。」

千夏はテキパキと挨拶を済ますと、隣の席の弥生に話しかける。

「ねーねー、弥生、来週どこ行くか決まってる？」

「千夏には教えないよ。ボクはボクの行きたい所に行くんだ。」

断固そっぽを向いて答えようとしてもしない弥生に対し、千夏はじれったそうにしている。

「あー、朝の事でしょ。それは悪かったと思ってるって。」

「ホントにいい？」

じーっと上目づかいで千夏を見つめる弥生。千夏はその視線に居たたまれなくなり、目を逸らし、自分のしてしまった事を反省していると言った。

「で、弥生はどこに行くの？」

「ボク？ボクはまだ決まってるないよ。」

やっぱりな。小声で千夏は言った。弥生は頭から疑問符を出して

小さく首をかしげる。

「な、何でもないよ。じゃあさ、私と警察署、見に行かない？確かにリストにあったはず。」

「まー、行ってもいいかなー。お巡りさんには結構お世話になってるし。」

「決まりだね、じゃ、改めて来週話そっか。」

千夏は嬉しそうにスキップしながら次の時間の授業に向かって行った。取り残された弥生は少し茫然とするが、ま、いっかと言って、追うように教室に向かって行った。

放課後、弥生は図書館に居た。

「うーん、警察かー。千夏に唐突に言われたんだけど、ボクがしつかり調べとかないとアイツに馬鹿にされるだろうし、何か普通に行くのもシヤクなんだよなー。」

山積みの本をばらばらと捲りながら、弥生は漢字と苦戦していた。

「えーっ、これは何て読むんだ？こつむしっこつぼうがい？しよつがいちし？」

刑法や警察の仕事の本と苦戦しながら、弥生は頭を抱え込んだ。

「あー、もう駄目だ。ボクには無理っ！！」

シヨートした頭を窓から投げだすかの如く、弥生は窓から顔を出し、向かい来る風に顔を当てた。冷えていく頭と共に弥生はふとある事を思いついた。

「あ、そう言えば六年前にお父さんがどうして亡くなったのか、地方新聞に載ってるかも知れない。」

そう言って弥生はカウンターまで走る。隣の机の優秀そうな男子が口元に指を立て、静かにするように言った。そして少しシヨボーンと落ち込む。

「先生、古い新聞ってありますか？日付は……の……が見たいんですが。」

「ちよつと探してみるね。書庫は一般公開してないんだけど、良かったら来る？」

「見たいです。お願いします。」

先生はカウンター下から赤い札の付いた鍵を取り出すと、カウンターの奥にある書庫の鍵穴に差し込んで、ドアを開ける。

「うわー、案外狭いんですねー。」

「悪かったわね。で、……日だっけ。待ってて。」

先生は書庫の奥に行き、新聞の山を探る。そして、ここじゃないかと思う日付の新聞を下から引っ張り出し、埃を払って日付を確認した。

「うん、これだね。はい。」

「ありがとうございます。」

「欲しかったらコピーを取ってあげるから。持ち出しちゃ駄目よ。」

「はい。」

気の抜けた返事とお礼を言った弥生は机に戻って地方新聞に目を落とした。

「えーっと、あー、懐かしい『×マンとゴカイダー』だ。この頃やってたんだー。」

テレビ欄に目を奪われ、三分ほど経過。その後、自分の本題に気づく。

「あ、そうだった。お父さんがどうして亡くなったかだよね。」

トップ記事から目を配っていき、なかなか見当たらず、一通り見渡す限りは記事に掲載されていない事を知る。

「うーん、無いなー。」

何度も目を通すが、無く、弥生はまたある事に気がついた。

「あ、そうだった。お父さんの命日じゃなくて、その二、三日後の新聞じゃないと載ってるわけ無いよね。どうして気づかなかった

んだろ。」

そして、また弥生はカウンターまで走った。同じ人に少し睨まれ、静かにするように口元に指を立てたサインをまたやられ、またやってしまった、と更に落ち込みながら、先生の所まで向かって行った。

「どう、あつた？」

「無かつたんで、二、三日前の新聞出してくれませんか？」

「もう、書庫に入るの面倒臭いんだからね。これで無かつたら諦めなさいよ。」

先生は書庫から二、三日前の新聞を引っ張り出してくると弥生に渡した。

「先生酷いよー。これで無かつたらどうするのさ。」

「はいはい、あなた一人の為に動くのって結構疲れるんだからねほら、行った行った。」

ポンポンと弥生の背中を押し、カウンターから追い払うようにして、先生は椅子にどかと座って動かなくなった。

「ボク、先生の嫌な一面見ちゃったかな。好きだったのに。」

少し残念そうに弥生は机に戻り、新聞に再び目を落としたり。

「あー、あつたあつた。うちのお父さんの名前が書いてある。」
三面記事の隅っこに、ひっそりと書かれていた記事。そこにはこのような内容が書かれていた。

8月31日（木）

××市 町、 マンション403号室の寝室にて、 苑田貞夫さん（27）が青酸カリを使用して自殺を図っていた。警察の調べによると、彼はここ一週間全く家に帰る事が無く、毎日残業をしていたらしい。更に、朝方にかけての睡眠時間を削ってコンビニエンスストアなどのアルバイトをして必死に働いていたようだ。

その過労が鬱病になったと思われる。高校時代の友人は、彼のよう

な真面目で気さくな仲間を失ってしまった事が悲しい。と遺憾を示していた。××県警は今後、彼がどのような状況に至ってしまったのか、調査を続けると話していた。

「こんな事があつたんだ。知らなかった。」

弥生は父の死因を初めて知ったショックに戸惑いを隠せず、ただ悲しみに浸っていた。

「誰がお父さんを追い込んだかは分からないけど、ボクの家族をメチャクチャにしたのは許せない！！ホントに許せない。」

弥生は机に新聞を叩きつけた。流石に三度目だったのか、勉強中の優等生は立ち上がって弥生を叱ろうと近づいてきた。しかし、弥生はその男子を冷酷に睨み殺す。男子は軽くたじろぎ、咳払いをして席に戻って行った。

「所詮分かるはずもない。そこら辺の奴には。」

弥生は眼つきを尖らせ、新聞を返した後、凄まじい剣幕で図書館を出て行った。

帰宅後。

「ただいまー。」

「お帰り。あんた、あんな慌てた家の出方したら車に轢かれるわよ。」

「んー？その時はその時だよ。」

「そんな言い方ないでしょ。人が心配してあげてるのに。」

「……ご飯いらないから。」

弥生はそれ以上何も言わず、部屋に戻って行った。

「全く、ホント、気難しい。反抗期かしら。」

母は溜め息を吐きながら料理を始めた。

「お父さん……。」

ドアに身を預け、弥生は独り亡き父を思った。

次の日。

「おはよー。何か元気ないじゃんか。」

顔を曇らす弥生に対し。心配する千夏。

「ううん、何でもないよ。ただ考え事してただけ。」

「ならいいんだ。今日も一日元気出して行こーっ!!」

千夏はそういうと校門まで駆けて行った。

「わーっ!! 待ってよ。置いてかないで。」

息を切らしながら弥生は追いかけて行った。

学校に着くと、千夏は女子を招集し自分の席で、妙に神妙な顔つきをして小会議を始めた。

「昨日、本屋行ったんだけどさ、めっちゃイケメンのお兄さんがいたんだ。」

「えー? どんな人?」

「うーん、妙に落ち着いた雰囲気で、心理学の本読んだ。そして、三ページ捲るたびに咳払いしてた。」

「そこまで見てたの? なんかキモいよ。」

「じーっと見てて相手は気付かなかったの?」

「うん、あの人の集中力は異常だったよ。私がつい横顔に見惚れちゃって、持ってた本落としたらやっと気づいてさ。」

「で、で、どうしたの?」

「本をその人に拾ってほしかったんじゃないの?」

女子の間で期待をするような空気が流れ始める。

「んー……特に何にもなかったなー。」

女子たちは期待外れの答えを出され、ブーイングを連発した。しかし千夏はあのイケメンにまた会えるかな。と一人思いを馳せたりしていた。

そして、朝の予鈴が鳴り、それぞれ散る様に席に着いて行った。教員もそれと同時に入ってくる。

「ほらほら、席に着いた。」

出席簿を煽ぐようにパタパタさせながら、男子生徒を追い払った後教卓に立った。

「えー、出席取るぞ。あおきー、あおむらー、」

担任は手際よく出席を取り、朝の連絡を始めた。弥生はそれを片耳に流しながら、ボーっと窓を眺めていた。

それから職業体験の日が来た。

「あー、お前ら、行きたい所を挙げてくれ。多数決を取ってグループ分けするから。」

先生はリストアップされた職場リストから、行きたい所を生徒に聞き、それからグループを作成した。

「うーん、警察署が多いみたいだなあ。特に男子！お前らは少し他に移れないのかあ？」

男子達の間でざわめきが起こる。誰が譲るものかと、譲ってたまるかどひしめき合っている。

「えー、女子は少ないみたいだから、これで決定するぞあ。」
担任は黒板に大きく丸をし、残った男子共をふるいにかけて始めた。

「良かったね、決まって。」

「うん、まーね。」

弥生は相変わらず間の抜けた返事をした。

「ちえ、ジャンケンで負けちまったよ。お前がグー出さなきゃ。」

「やったね。お先に楽しんでくるわ。」

男子は最終的に選別、残されたメンバーは悔しながらそれぞれの

行きたい所に散っていった。

「えー、あんた達が来たのー？」

「悪いかよ。」

「頼むからうるさくしないでよね。」

千夏は来た男子を冷やかにあしらひ、男子はそれに対して反論をしていた。

「よろしくね。苑田さん。」

「ううん、千夏あんなんだけど無視しちゃって構わないからね。」

弥生はにこにこ温かく迎えていた。

「じゃあ、午後から実際の職場に行ってもらおう。現場の人にはくれぐれも迷惑をかけないようにな。」

「うーい。」

「特に警察署。お前らは本当に心配なんだからな。」
先生は選択ミスをしてしまったと溜め息交じりに言うと、代表である千夏に菓子折りを持たせ、出発させた。

「しかし、なんであんたなのよ。あんたなんか警察官に向いてないって。」

「うっせーな。お前こそ、花屋にでもすれば良かったじゃんか。」

千夏と男子はまだ喧嘩を引きずっているお互いが納得のいく終わり方をしていなかったのか何なのか。

「まだケンカしてるのー？」

「お前ら、ホント仲いいよなー。」

「千夏、頼むからそのテンションで職場の人に迷惑掛けないでねー。」

外野は半ば飽きれながら囃し立てている。

駅まで歩いて行くと、セルリアンブルーの高層ビルが現れる、比

較的ここいらでは規模の大きい警察署のようだ。

自動ドアをくぐると、千夏は先陣を切って案内係の人に職業体験に来た事を告げた。

「はい、お聞きしてますよ。桜坂中学校のお方ですね。ではついて来て下さい。」

案内係の人に言われるままについて行くと、トレンチコートと大きめのハットを被った大柄の柔和な表情の男性が案内役として現れた。

「あ、赤沼さんだ。」

弥生は懐かしい顔立ちのおじさんだと少しほっこりとした表情で咳く。

「ん？あの人知り合いなの？」

千夏はそれに対し、不思議そうに思った。

「うん、うちに良く来てくれる刑事さんだよ。」

「弥生たん、ケーサツのお世話になってるの!？」

千夏は弥生が何か犯罪を起こし、某院送りになっているのでは無いかと軽く想像してしまった。

「ん、まーね。お父さんが亡くなった後、良く来てくれたし。なんかお父さんと同年だったらしくて、妙に親近感が沸くんだった。」

弥生は若干目を潤ませ、表情を曇らせる。この前の一件を思い出してしまい、少し悲しくなってしまったようだ。

「おー、弥生ちゃんじゃないか。大きくなったなー。お姉ちゃんはその後どうだい？」

赤沼さんは弥生の頭をくしゃくしゃと撫でた。弥生ははっと我に返り、赤沼さんに視線を合わせる。

「いえ、それつきり。」

「そうかー。早く帰って来てくれるといいなあ。天国のお父さんもきつと心配してるだろうしさ。」

赤沼さんは優しく笑顔で言う。弥生に背を向け、皆の説明を開始す

べく、所定の位置まで戻った。

「弥生、あの人いい人じゃないか。私もいるしさ、負けないで。」

さりげなく横で聞いていた千夏は弥生に励ましの言葉を贈った。

「千夏……ありがとう。」

千夏の言葉にうつると来てしまい、弥生は少し目元を袖で拭って、前を向いた。

「さて、今日案内を任された刑事課の赤沼だ。私は詐欺、強盗殺人、麻薬、それらの取り締まりを請け負っている敏腕刑事だ。」

赤沼さんは被った帽子をちょいちょいといじりながら、言ったびポーズを取りながら、カッコよく言い放った。

「何言ってるんですかー。いつもは見回りって抜けて、小一時間競馬やパチンコ行ってるって聞きましたよ。『サボりの赤沼』ってうちの課でも有名なんですよ。」

隣にいたもう一人の案内役の女性は横目で睨みながら手厳しい一言を放った。

「実際、今日の案内役だって、赤沼さんが適任だってわざわざ回された仕事だつて聞きましたよ。まあ、別の意味（子供好き）で適任だとは思いますが。」

女性は赤沼さんの素性を公に暴露すると、矛を収める。

「あー、バレたか。バリバリエリート刑事として今日は皆に良いとこ見せてやろうと思ったが、世間の目は欺けないな。」

赤沼さんは残念そうにヘラヘラと軽く笑いながら、頭を掻いた。

「ここに居る時点で全然バリバリじゃないと思えますが。」

「咲ちゃん、今日はいつもより尖って無いかい？」

「その名前と呼ばないでくださいッ！！」

女性は赤沼さんをキツと睨むと足をヒールの細い部分で踏みつけた。

「いたい、いたい。すみマセンでした。」

赤沼さんは謝罪の言葉を述べると女性は足をどけてくれた。

「いやー、女性は怖いなー。じゃあ、行こうか。」

赤沼さんはそういうと警察署の施設見学を開始した。男子達は赤沼さんと言う人間性に心を掴まれ、千夏は自分の事を言われたんじやないかと少し静止。弥生は必死に置いてかれまいとついて行つた。

「はい、ここは『生活安全課』。お前さんたちがいつも交通事故に遭わないのもそうだし、将来的に最もお世話になるのもこの課だな。何か質問なるかー？」

「……。」

「無いようだから次行くぞー。」

「ここは会計課だ。落とし物をした時、ここに届けたり、警察官の給料の管理をしたりする、地味だが色々責任ある課だな。何か質問なるかー？」

「あー、地味なところしか見てないけど、こう、事件があつて華麗に解決したり、中国人マフィアや暴力団を取り締まるような派手なところ無いんですか？」

男子生徒は身振り手振りで必死に伝えようとしている。

「あんた、刑事ドラマの見過ぎじゃない？」

そこに千夏は茶々を入れた。

「おー、ある事にはあるんだが、やっぱり事件つてのは突発的に起こるもんだからなー。実際働いてる現場を見せたくても見せられないんだよ。それに、あんまり公にするのは良くないしなー。」

赤沼さんはそう言うと男子生徒にドンマイ、と言う温かい眼差しを向けた。

「そうなんだー。」

男子生徒は残念そうに俯いた。

「まあ、俺みたいに刑事になる事が出来ればやれない事も無いか

な」。頑張ってくれ。」

赤沼さんは親指を立て、男子に励ましのサインを送った。男子はそれを見て何か熱いものを感じ取ってしまい、涙ぐむ。

「あがぬまざーん！俺、がんばりませー！！」

涙を混じらせた、叫ぶような、暑苦しい意志表明をした。

「まあまあ、今はまだ中学生なんだろ。先はまだ長いんだ。学生生活してるうちに他にもやりたい事出てくるだろうし、あんま焦んなよ。」

赤沼さんは男子生徒に胸を貸し、背中を軽く叩きながら励ましていた。そして、男子生徒が落ち着くのと同時に、

「よし、次行くか。」

と照れ臭そうに言った。

「うーっす。」

さながら体育会系。その風景を千夏は理解できず、周りの警察官たちは「赤沼さん今年もやってるよ。」「毎年良くやるよ。」「と口々に囁いていた。

「さて、最後は君らに制服を着てもらおうか。サイズが少し大きいかもれないが、我慢してくれよ。」

そう言うのと先ほどの女性が一人一人にポリ袋に入った紺色の制服を手渡した。

そして、皆は赤沼さんがくれた制服を持って、更衣室を借りて着替えに向かった。十分ほど経つと散り散りに更衣室から小さな警官が出て来る。

「おー、やっぱりぶかぶかだったかー。」

赤沼さんは皆の格好に笑ってしまった。女子は袖口がだらんと垂れ、男子は少し肩幅が広がったようで、じれったく動いている。

「赤沼さん、小さいの無いんですかぁー？私、なんか恥ずかしい

感じが……。」

千夏は何となく来る気恥ずかしさに居たたまれない。

「いや、いいんだよ。その初々しい感じが。その弥生ちゃん見てみなよ。」

赤沼さんは弥生の方向を指差した。

「だらーん、ぶかぶかぁー、袖おばけ。」

つま先の裾や指先の袖と戯れる弥生。女性はその姿に口元を押さえて悶え、男子達はその姿に笑っている。見ている側からすればものすごく和んでしまえる風景だった。千夏も一瞬その姿に見惚れてしまいそうになる。

しかし、何となく弥生が辱められているような、モラルに反した「リーダー」として取り締まらねばと言う行動に、気づく。

ゴツン、鈍い音がして弥生の頭には三センチ大の大きなたんこぶが出来た。千夏は弥生を殴った手をさすっている。

「いつてー。何すんだよう!!」

訳も分からず、ただ殴られた弥生は眼もとに涙を溜めながら千夏に怒った。

「あんた、ここに何しに来たの?!遊びに来たんじゃないんでしょ!!将来『袖お化け』になりたかったら家に帰ってお父さんのワイシャツと戯れてなさい!!」

一瞬千夏の脳内に芳しい物が過ぎる。しかし、それを今は親心だと押し殺し、ブーイングする男子を睨み殺し、親身になって弥生を叱った。

「お姉ちゃん……。」

弥生は千夏と姉が一瞬重なったのか、気を取られてボーっとし、千夏に心配されて平静を装った。

「ううん、何でもないよ。ありがと、千夏。」

そして、女性は手を叩き、事を納めるように皆に呼びかけた。

「じゃあ、皆替え終わったみたいだし、写真撮って解散としま

しよう。」

「えー、もう終わりかよ。」

男子は口々に寂しさを言ってみたりしていたようだったが。

「痛かった？ごめんね。」

「いや、大丈夫だよ。千夏、行こっか。」

弥生は千夏の手を取り、男子のいる列に向かって言った。

「今日はありがとなー。この日がお前らにとっていい思い出になるといいけどな。まー、俺みたいな警官にはなるなよ。」

皆の間で一斉に笑い声上がる。そのタイミングでシャッターが切られた。

「よし、今の表情もらった!!!」

赤沼さんはガッツポーズを派手に取った。

「あー、俺、まだ表情決めてなかったのにッ!!!」

「おせえ、おせえ。お前らが良い顔しても変わんないって。もともと明るいな。それより、お前、横向いてたぞ。」

「え、俺?!」

男子は周囲に確認している。しかし周りは「しらねーよ」の一点張り。若しくは「向いてたんじゃない」と責任な返事。

「ちくしょー、俺の青春のページが!!!」

男子は嘆いた。笑い声がわっと上がり、絶えなかった。

それから一斉に帰宅。

「弥生、今日は楽しかったね。」

千夏は少しばかり弥生のたんこぶを心配しながら、今日の出来事を回想するように弥生に話しかけた。

「うん。」

しかし、弥生は俯いて何かを考え、無意識な、意思の無い返事で答えた。

「弥生たん、どうしたんだよっ！！元氣ないじゃんか！！」
千夏はぼんぼんと弥生の背中を叩き、励ます。

「……千夏、ボク、行くところあるから先行つてて。」
弥生は一步踏み出そうとして足を止め、ボソツと囁くように言った。

「えっ……分かった。じゃあ、明日、が、学校でね。」

千夏は若干惑いながら弥生にお別れの挨拶をした。

「うん。」

弥生は千夏 of 言葉を聞き終えると小走りで警察署に戻っていった。

解散して十分も経たない警察署。赤沼さんは受付の女性を口説いているのではないかと言うゆるい格好で今日の反省を女性と報告書にまとめていた。

そこに自動ドアをくぐり、息を切らした弥生が入ってきた。

「赤沼さん！！」

弥生は一階フロアで、他の人の視線も目に入らないような、半ば錯乱した気持ちで赤沼さんと呼んだ。

女性は後ろにお客様ですよ。と言うような感じで指を差し、赤沼さんは弥生に気づく。

「ん？忘れ物か？」

赤沼さんはゆっくりと弥生の方へ向かって来た。

「どうした？随分急いだ感じじゃないか。息まで切らしてどうしたんだ？」

「今日じゃないと気持ちが変わってしまう気がして。」

弥生はそう言う息を軽く吸い込んで大きめの声で言った。

「お願いです。お父さんについて知ってる事、全て教えて下さい
！！！」

赤沼さんは参ったと言う顔をし、周囲を見回して、弥生を外へ連

れ出した。

「取りあえず外へ出るぞ。ここで話せる話じゃない。」
赤沼さんは小柄な弥生を脇に抱え込むと外へ連れ出した。

「で、お前さんは何が聞きたいんだ？」

赤沼さんは少し不機嫌そうな顔をして言った。そして胸ポケットからタバコとライターを取り出して吹かし、煙を吐いた。

弥生は少しためらうが、色々聞きたい事があり、軽く困惑していた。思い切つて言ったものの、気になる事が多過ぎたから。煮詰まつて加速する感情と共に、自らの整理のつかない気持ちに苛立ちを感じながら焦げつくように赤沼さんを見つめていた。

そしてやつと出た一つの言葉。

「お父さんはどうして亡くなったんですか？命を絶つ様な理由があつたんですか？」

弥生は迫り来る自らの拳動のおかしさ、身震いを押し殺しながらはち切れそうな気持ちにブレーキを掛けていた。この一言がダム決壊の如く、流れて止め処なく溢れるような気持ち。それを自らの自制心で抑えつけていた。

赤沼さんは煙草の半分が灰になるまで一杯に息を吸い込んで、弥生にかからぬよう、一気に吐き出した。そして、弥生の目を見入る様にして言った。

「急に何でそんなこと聞くんか？お父さんが恋しくなったのか？そんな訳無いだろ。」

赤沼さんは続けて言った。

「弥生ちゃんは見ると限り、お父ちゃんだし、十三、十四年間はずーっと苦労してきたように思えるんだ。お父さんの事も思い出さないように、自ら私情に持ち出さないようにしたと思う。違うか？」

赤沼さんは弥生の腹を探るような物言い、ゆっくりと弥生に分かる様な物腰の低さで話す。

「俺は今までの経験上、弥生ちゃんみたいな子は、残されたお母さんに迷惑掛けないよう必死に頑張ろうって思ってる。お父さんの事も思いつかないようにしたりしたんじゃないか？」

「……まあ、そうですね。」

弥生は静かに自らの潮騒が静まっていくのを徐々に感じていた。

赤沼さんは弥生の気持ちを汲むように続けて口を開いた。

「お父さんを思い出されるきっかけってなんだったんだ？」

赤沼さんはシンプルに言い切つて、沈黙に入る。単純なその一言は弥生自身の気持ちを掻き立てた。

弥生は絞り出すような悲しみのこもったような声で言い始める。

「つい最近、お父さんの命日が来ました。ボクももう中学生だし、少しは新聞でお父さんがどうして亡くなってしまったのか、それを理解しておきたい、学校の図書館で五年前の新聞を読みに行つたんです。そしたらお父さんは仕事を重ねた事による疲労に耐えかねなかつたって書いてあつて。」

弥生は泣き出しそうになるが、唇を噛み締めて感情を押し殺す。

そして、半ば叫び声に近い声で言った。

「お父さんは、お父さんはどうして仕事をしなければならなかつたんですかっ！仕事をしなければならぬほどお金が必要な状況になつてしまつたんですかっ！ボクはまだ小さいから、仕事がどれだけ辛いか分からない。でも、でもね、お父さんは誰かに相談する事も無く一人で背負いこんで、居なくなつて。ボクはこの感情をどこにぶつけたらいいか。」

言い切つて弥生はボロボロ泣きだした。幼いながら情緒不安定であり、赤沼さんに八つ当たりするような、雑な口調で、乱暴な態度で、人に物を聞くような態度ではなく、怒りと悲しみを半々に織り交ぜたような、そんな感情をむき出しにして真っ向から赤沼さんにぶち当たってくる。赤沼さんはそんな弥生の一言一言を怒りもせず、

ただ頷きながら聞いていた。

「言いたい事は分かった。悲しいのも分かった。しかし、お前さんはそれを聞いてどうしたいんだ？」

赤沼さんはシンプルに言い放った。そして、煙草をアスファルトに押しつけてもみ消す。

「もし、もつとひどい状況だとしたら、お前さんはそれを受け入れられるのか？今のお前さんは悲しみや怒りに吞まれて、自らのキヤパ……つまり、感情の器から溢れだしてるんだ。そんなんで、真実を知って、目先真っ暗で生きて行けなくなったらどうするんだ？」

赤沼さんは弥生を第一に思って話をしてくれた。そして、弥生は自らのここまでの感情を察してみるが、「打ち克てる」といった自信が感じられなく、ただ悲しみや怒りに貪られたと言う後味の悪さが残った。弥生は悔しくも思い当ってしまふ節があり、何も言いだせなくなる。

「すみません。」

赤沼さんは戸惑っている弥生を見て、少し可哀想になったのか、頭を撫でてくれた。

「少しキツイ事言い過ぎたな。悪かった。まあ、もやもやした感情が残っても仕方ないから、シンプルに考えようか。」

赤沼さんは意を決して話し始める。弥生は喉を鳴らして赤沼さんの一言に耳を傾けた。

「お前さんの親父さんは詐欺に遭ったんだ。」

「詐欺……ですか？」

弥生は少し黙り、恐る恐る正解では無いかと思う事を述べてみた。

「あの、テレビとかでよくやるおばあちゃんたちをオレオレって騙して、お金を振り込ませる奴ですか？」

弥生は身振り手振りで懸命に伝えようとする。

「んー、まあ、そんなもんだな。俺ももう三十二だが、あれぐらいの歳んときは家が欲しくなるもんでさ。」

「家ですか？」

「そうだ。やっぱり家族もいて、仕事もしてれば自分の家くらい欲しくなるだろ。お前さんの親父さんは一生懸命マイホームを買う為の貯金をしていたんだな。」

「その時から仕事を重ねたんですか？」

「いや、身体持たないって。」

赤沼さんは欲しい物の為にそこまで頑張れる人間は居ないと嘲笑った。

「まあ、その付近の時期さ。お前さんの家に、ある不動産屋が物件情報を持ちこんだんだ。確か……三千万位の家だったかな。お前さんの親父さんは一千万までは貯金してみたいで、残りの二千万はローンを組んで支払う形を取ったんだな。」

赤沼さんは記憶の節々を辿り、字引きを引くように話をしてくれる。弥生は言葉の半分は意味が分かっていない様子だった。

「ローンって何ですか？」

「高い物を買う時、何回かに分けて買う事だよ。その際に『契約』って何回かに分けて買う事に同意させて、変更できないようにする手続きを行う訳だな。」

赤沼さんは丁寧に説明をしてくれる。弥生は理解できたのか、小刻みに相槌を打ちながら聞いていた。

「それで、その家は真つ赤な二セモノ。更に親父さんはそこまで稼いで来た一千万を取れて、泡のような借金まで押しつけられちまつたんだよな。」

赤沼さんは少し悲しそうに俯き、煙草を再び口に啜えて火を点けた。

「俺が話し聞いた時には、もう手遅れでさ、親父さん、被害届出して、借金は何とか出来ただけど、金は返ってこないし、一向にコトが良くなる事は無かつたんだな。」

「お母さんはどうして知らなかったんだろう。」

弥生は思い返せば、お母さんの口からお父さんが詐欺に遭っていた事を聞いた事が無かった。そして、今改めて聞く真実。赤沼さんは一つ、知るべきでなかった事を他人に伝え、軽く自らの行為に罪悪感を抱く。

「俺は、そこら辺は詳しくは知らないが、親父さんの気持ちを察すれば、家族に言いづらかったんだと思う。懸命に稼いできた、一千万ぶん取られるなんて俺はごめんだし、家族には言いたくなかったんだろうな。」

雑に言い放った赤沼さんはまた煙草を吸って煙を吐いた。

「……………」

弥生はただ黙って赤沼さんの話を聞いていた。赤沼さん自身の語り口や 気持が当時の父に重なる様に思えてならなかった。ただひたすら父の事が悔まれて仕方なかった……。

それから一週間が経った。秋も深まり温かいコーヒーが恋しくなる季節。千夏はそれが恋しくなったのか、口を開いて寒さを主張した。

「うー、寒い寒い。もうすぐ冬だね。弥生さんの家ではコタツ用意した？」

千夏はわざとらしく身震い。しかし弥生はもこもこのファー付きのコートを羽織ってぬくぬくの満面の笑みだ。

「いや、うちはまだ電気カーペットで間に合ってるから大丈夫だよ。」

「ちっ、贅沢風情が。」

千夏は、口悪く弥生の季節感を羨んだ後、地べたに唾を吐くふりをして見せる。

「弥生さんはボーイッシュで良いけどさー、私ら『乙女組』は冬場でもスカートで居ないといけないんだ。弥生さんはファッション

とか気にしなくていいかも知れないけどさー。」

千夏は、「弥生は」と二回ほど失礼な言葉を白く曇った息と共に吐き散らし、弥生は自分こそボーイツシュじゃないか。失礼極まりないよ。と少し不平不満のぶつけ合い。そして、ひと段落した後、先に口を開いたのは千夏だった。

「弥生たん、ファミレス行って温かいもん頼もうぜー。」

「えー、ボクはそのまま真っ直ぐ家に帰ってたんだけど。」

「君とはとことん意見がそぐわないなあ。少しは譲り合いの精神持たにやいのかなー。」

千夏は、猫撫で声で弥生をくすぐり、実力行使で同意を求めてきた。弥生は流石に歯止めが効かなくなった千夏に対し、抵抗することも適わず、しおらしく降参と同意を見せたようだった。

「でっ、どこに行くのっ!」

弥生は少し不機嫌交じりに千夏に聞いた。

「んー、ファミレスって言ったけど、ファミレスって何かありきたりで味気無い気がすんのねー。」

「えー、また変えんのー?」

「さつき負けた君が言うことかなー。私を『姫君』と呼びなさい。と言ったはずじゃないか。」

「『姫君』ってより『暴君』じゃないか。」

弥生はぼそつと不満をそこいらに居たごみ箱を漁っているのっぺり顔の野良犬にぶちまける。しかし、野良犬は不可解に首を傾げ、そのままソーセージを口に啜えてどっかに行ってしまった。

弥生は犬に言っても分かんないか。と少し落ち込み、千夏の意見を改めて聞くことにした。

「で、どこに行きたいのさ。」

「つい最近、老舗の喫茶店見つけたんだけどさ、あそこのアールグレイが最高で、甘酸っぱいフレーバーが良いんだよねー。」

「紅茶ならうちのお母さんの方が美味しく入れられるけど?」

「ワッフルなんかなかなかの甘さ控えめで。」

「オーブンの扱いはうちのお母さんの方が手慣れてるよ。その人なんかきつとバイトさんでしょうが。」

否応なしに意見を突っぱねる弥生に対し、千夏は痺れを切らしたのかまた両手を天に掲げ、某必殺技を放とうと試みる。しかし、弥生は華麗なステップで距離を取り、付け足すように言ってくる。

「うちのお母さんが千夏のお母さんみたいに『肝っ玉母さん』だったら別。でも、うちの母さんに小さいころから紅茶だの、スコーンドの、メイプルシロップだの、ずっと味わってきたから『他社の追随』を許さないの。ボクを納得させたくば、アルバイトじゃなくきちんとしたところを紹介して下さい。」

弥生にしては珍しく、千夏が気圧されている。不平不満も相俟って弥生のプレッシャーは一重にも二重にも重なった。

「分かったよ。来なさい！！あんたには口で言っても分かんないみたいだから実力行使ならぬ、実食行使あるまでよ。」

千夏は弥生の手を引っ張って、妙なオーラをまといながら気高く歩きだした。相変わらず強引だなーと弥生は引かれるままについて行く事にしたが。

「ここは『山奥カフェ・ぶつち』って言う老舗の喫茶店だよ。海原さんって還暦を迎えたおじいさんがコーヒーを入れてくれるの。

あつついコーヒーぶっ込めば、アンタの肥えた口も少しは黙るでしょよ。」

千夏は店の前に立ち、ツン九割の殺意剥き出し、否、刃物剥き出しの棘のある言葉で弥生の心突き抜ける。

「全く、私も毎日紅茶飲めるような優雅な家庭に育ちたかったわ。」

少し小声でぼそつと呟き、木造の建物の年輪を興味深そうに指でなぞっている弥生に合図をし、先陣を切って入って行った。

中に入ると、木のフワツとした温かい匂いにコーヒーの香ばしい匂いが相俟って心を和ませる。そして、温かな温暖色の照明は絶滅したかと思われた白熱球が醸し、ジャズのゆったりとした曲調がクラシックレコードから流れてくる。弥生はガサツな千夏がこんな所に入るんだと少し感嘆し、少しムーディストな一面を垣間見た気がした。

「へー、千夏にしては良いとこ見つけたねー。」

「悪い？アンタがイメージしている程、私って人間は簡単じゃないの。少しは見直した？」

千夏は少し鼻高々に『自分のイメージをなし崩しにしてやった』と言う所を誇張して言う。しかし、弥生はさほど気にしていなかったみたいで、さっさと注文をしようと千夏の袖を引っ張っている。

「全く、人の気も知らないで……で、注文は何にするの？」

「ホットミルクー！」

弥生は元氣よく手を挙げながら言った。海原さんはそれを聞いて牛乳を鍋に掛ける。

「アンタねー、私がせっかく『お気に入り』に連れて来たんだから、紅茶くらい頼みなさいよ！ホットミルクって何様のつもり？」

「だつてえ、温まるじゃんか。千夏もカルシウム足りてないから

……（以下略）」

「いらない！！海原さーん、ダージリンとアールグレイお願いしまーす！！」

「はいよ。ホットミルクはいいのかな？」

「要りません。」

海原さんは、慣れた手つきで伝票を書き、千夏はわざわざ弥生の注文を押しつけてまでアールグレイを頼んだ。そして、弥生は不満なのか、頬を河豚のようにぶすーっと膨らませ、千夏を睨んでいる。

「さっき見直したと思ったたらこれだよ。ダメだなあ、千夏は。」

「紅茶貴族のアンタは紅茶のテイスティングを出来るんでしょ。私を認めるくらいのこと……って言うて来たのはアンタじゃないの。」

「そうだけどさー、ボクは『機能性重視』の思考なのっ！寒いときはホットミルク、暑いときはアイスクリーム！柄なんか気にしちや駄目だよ。」

弥生は断固として、質より量ならぬ、ムードより機能性であると主張した。しかし、千夏は冷ややかな目で弥生を見て、少し嘲笑う。

「ダメだなー。アンタは少し、ムードって物を学ばなきゃ。日本には『わびさび』。外国に行っても『ムード』ってあるんだし、今、一時を楽しむ私達にとって必要な事なんだよ。」

「千夏がおかしい！！いつもはガサツな癖に！！」

弥生は本気で千夏がおかしくなってしまうたのではないかと額に手を当て、健康であると確かめる。

「私は私だつー！！」

わなわなと拳を震わせ、腹の中で怒りを押し殺しながら話す千夏。

弥生は壁際に追い詰められてしまったネズミのように小さくゴメンナサイと言った。

「お嬢さん達、仲良いんだね。気に入ったよ。今日はサービスしといてあげるよ。」

そして、海原さんは冷蔵庫からチーズケーキを取り出し、皿に盛り分けて二人の前に置いた。

「あ、有難うございます。」

思わず、声を八毛らせ、千夏と弥生は目の前のチーズケーキのクリームの光沢に目を輝かせる。

「じゅる。この光沢、業物であるな。」

弥生は刀鍛冶の一興を演じるようにチーズケーキをまじまじと見つめ、品も無く、真っ直ぐにぶすりとフォークを突き立てる。そして、半分に切り、口に運び、咀嚼……。

「うっめー！！」

弥生は思わず声を上げ、女の子らしからぬはしたない言葉で甘美なるケーキの美味さを主張。そして、千夏に水平チョップされる。

「アンタねー、今日何回突っ込ませれば気が済むのよ。全く、ムードぶち壊して……。」

千夏は軽くイライラとするが、これが「弥生らしさ」であると思つとにやけてしまった。海原さんも微笑ましく見ている。そして海原さんは壁時計を見ながらぼそつと呟いた。

「もう五時かー、そろそろサイトウ君が来る頃だなー。」

「サイトウ君？」

弥生は興味深そうに海原さんに聞いている。千夏はと言うとチーズケーキを突きながら、「確かに美味しいわねー」と呟いている。

「うん。一年前から働いてる結構大人しい男の子だよ。普段お客様の前では明るく振る舞ってるんだけど、私や家内の前では大人しくなる不思議な子でね。シフト上、木曜と金曜にしか来ないんだが。」

海原さんは一人の孫を迎えるかのように柔和な笑みを浮かべ、サイトウ君と言う人を待ち構えた。

カランカラン。裏口のドアに付けられた大きな銀の鈴が鳴り、顔立ちの整った冷淡そうな青年がカウンターに入ってきた。

「海原さん、遅くなりました。」

「ううん、今日は客入りが少ないからね。ゆっくりやるといいよ。可愛いお客さんも二人いらしてるしさ。」

海原さんは弥生と千夏の方に目を見やり、そしてサイトウ君という青年に丁度入ったアールグレイとダージリンを手際よくカップに注いで運んだ。

「うわあー、いい香り。」

弥生はアールグレイの甘酸っぱく芳しい香りを鼻から堪能し、ふんわりと和む。しかし、千夏はサイトウ君をどこかで見たようにし

かめつ面で見ている。

「そう言えば、貴方どこかでお会いしませんでした？」

「いえ、俺は今日初めてお会いしますよ。会ったとしたら街の何処かですね。」

千夏はサイトウ君の言葉に歯痒い引っかかりを感じながら、何とか答えを紡ぎ出した。

「あー、思い出した。本屋のイケメンさんですね。」

「イケメンさん？」

サイトウ君は不思議そうに首を傾げる。千夏は「いえ、何でもありません」と咳払いをし、言い直す。

「いえ、あの、ここの近くの本屋で助けて貰ったしがない女子中学生ですよ。思い出しましたー？」

千夏はサイトウ君が覚えていない事に一瞬落ち込む。しかし、折れながらも立ち直り、健気ながら自分を思い出させるような言葉を並べた。

「あー、思い出しました。俺、毎日が目まぐるしく感じてて、どうも物覚えが悪いんですよねー。」

サイトウ君は頭を掻き、軽くヘラヘラと笑う。千夏はそのタイミングを狙って、ある事を切り出す。

「あの、つい最近携帯買ったばっかなんですっ！！友人ともまだ連絡先交換してなくて、良かったら『登録一番目』になってくれませんかっ！！」

千夏は決まった！と言わんばかりに胸のあたりでガッツポーズを決める。しかし、こう言うとき決まって、迫る物は弾かれる物な訳で。

「ごめんね。連絡先、あんまり交換しないようにしてるんだ。」

サイトウ君はすまなそうに千夏に頭を下げる。千夏は「終わった」と白く石化していた。

「それはそうと、苑田に妹なんていたっけなー。」

サイトウ君は弥生の顔をまじまじと見つめる。弥生は見向きもせ

ず、残り半分のチーズケーキを口内で味わい紅茶を飲んで一息ついていた所だった。

「失礼ですが、お名前は？」

サイトウ君はまさかの弥生に興味を示し、名前を聞く。弥生は落ち着いた表情で、千夏は焦りの表情で、サイトウ君を見つめ、弥生は返答をした。

「ん？ボクは『苑田弥生』って言うんだよ。どうしたんですか？」

弥生は何故名前を聞かれたのか分からず、少しポカンとし、サイトウ君は「やはり」と確信を突いたかのように顎に手を当てて考え込む。

「苑田さん、いや、弥生さん、ご兄弟は？」

「おねーちゃんが一人かなー。」

弥生は抜けた返答を返し、机の上にあった紙ナプキンで鶴を折り始めた。しかし、弥生は聞かれた内容が弥生にとって重要なことだったのか、ハツと気づき、サイトウ君に逆質問した。

「って、おねーちゃんの事知ってるの？！サイトウさん、超能力者？」

弥生は取り乱し、姉の事を知っているサイトウ君を不思議に思った。

「いや、目元とか……似てるしさ。苑田とは高校まで同じクラスだったよ。」

急にサイトウ君は口調が親しくなり、弥生も姉の処遇を聞いたのか、かなり取り乱している。

「で、おねーちゃんは今、何処に居るんですか？」

「どうして？お姉ちゃんと一緒に暮らしてるんじゃないのか？」
取り乱している弥生を宥めながら、さすがに不思議に思ったサイトウ君は弥生の私的事情を聞いてみる。

「ボク、幼い時におねーちゃんと生き別れたんです。幸せだった家族からお父さんが急に居なくなっちゃって、それに耐えられなく

なったのか、おねーちゃんは家を飛び出したつきり……。」

弥生は泣き泣き初対面のサイトウ君に感情をぶつける。サイトウ君は弥生の心の保身を保つため、それ以上聞くまいと、「分かった分かったから」と弥生を止めようとする。ここの喫茶店の空気も若干澱みだした。

「まあ、とにかく落ち着いてよ。聞いた限りだと、他県の大学に行っただつてのは聞いているよ。アドレスも変わってるだろうし、最近連絡取れてないから、詳しい事は分かんないよ。」

弥生は明白、早急に明かされる姉の居場所に泣きながら聞き入っているり、サイトウ君は知っている限りの知識や言葉で何とか力になろうと懸命だ。

「そこを何とか出来ませんか？何とか連絡付けられませんか？」

弥生はサイトウ君の肩をゆずぶる。サイトウ君は若干迷惑そうにしている。

「うーん、最近電話連絡取れてないが、妹だと言うのだったら教えてあげてもいいかな。でも、苑田、電話に出ないからな。」

サイトウ君は悩むが、意を決し、ポケットから携帯電話を出すと、電話番号をとメモ帳に書き出した。そして、折り目をつけて千切り、渡してくれる。

「ありがとうございますっ！！」

弥生は渡されたメモを千切れそうな位握りしめ、そして少し涙腺が緩む。

「苑田に会えるといいな。」

サイトウ君は弥生をの頭を撫で、そして、カウンターへ戻って行った。千夏はその姿を恨めしく思い、心配もした後、不満と心配を織り交ぜたような複雑な感情で話し掛ける。

「で、上手く行きそうなの？」

「六割くらいかな。最近色んな事があり過ぎて怖いくらいだよ。」

弥生はアールグレイの水面を見つめながら千夏に最近の出来事を

自分の言葉で少しずつ小出しにしながら打ち明けていった。

帰り道、千夏はいつになく神妙な面持ちだった。弥生の今回の一件。そして千夏自身が抱えて来た十数年分の悲しみの比にならぬ、弥生のその深さ。ヒトと言う生き物は、他人の痛みを分かるうとしても、所詮は他人の痛みでしかなく、親友の悲しみを半分預かろうと思っても、預かる事は出来ない。ただ傍で見守ることしか出来ないその無力さに痛く胸を締め付けられる気がした千夏だった。

「弥生、真剣な話してもいい？」

「うん？」

弥生も弥生自身、何か別の事を考えていたようで、不意に話しかけられてびっくりする。そして平静を装う。千夏は胸に手を当て、一呼吸ゆっくりと入れると、切り出せなかった質問を絞り出すようにして聞いてきた。

「お姉さんとさ、会ってどうしたいんだ？私は、弥生と小学校からずっと同じクラスで、弥生の事全て知ってる気になってた。でも、ここ最近、弥生は急に変わり始めて私にも分かんなくなってきた。時に取り乱したりしてる。家族の事、大切だとも思う。でも、弥生のお姉さんを追う姿、何か冷たくて、縋り付くような感じがあってさ、私の前からどんどん離れていくような気がするんだ。」

上手く言葉にする事が出来ないし、弥生自身の、『この良く分からない感情の引っかかり』を伝えるのに必死な千夏。

「ボク、そんな風に見えるの？この前赤沼さんにも言われたんだけど。」

弥生は自覚の無い感じ。しかし、弥生自身にも何か良く分からない感情が渦巻いているのは薄々気づいていたようだ。

「ボク、この前までお父さんやおねーちゃんの事、思い出す事無かったんだ。小さい頃にお母さんのエプロンぐしゃぐしゃにして大

泣きして、その日からもう泣かないって決めて生きて来たつもり。でも、この前から思い出すたびに悲しさが込み上げて来て。大好きな人に会えないのってこんなに悲しいもんなんだって再確認して。それから感情の歯止めが利かなくなっちゃってさ。強がっていたんだけどね。」

成長に伴う悩みや悲しみ。弥生が背負ってきたものは淡いような浮いたようなそんな話で無く、込み上げてくる寂しさだった。

それを誰かが埋める事が出来ればきつと容易い。しかし、その深くなってしまう溝は隠す事は出来たとしても、埋める事は出来なかった。

「弥生が辛いのは痛いくらいに分かる。でも、私じゃ駄目なのか？私が姉の代わりになって、私がお姉ちゃんとして一緒に生きていけないのか？」

千夏は精一杯弥生の心に訴えかけた。千夏は怖かった。家族と友人を天秤に掛ける事が。大切なものを二択にした時、どちらかが下位に回って劣る。弥生の心の中の『姉』という存在に負けるのが怖かったのだ。

「ごめんね。千夏は千夏だよ。ありがとう。今まで千夏を千夏として刻んで来た以上、ボクの中では変える事が出来ないと思うんだ。」

弥生は寂しそうに路傍の石ころを蹴り飛ばす。そして沈みゆく夕日を見ながら言った。

「千夏ってさ、ボクの中では不思議な存在なんだ。お母さんは違うし、一緒に生活していない。それに知り合ったのは小学校から。でも、ボクの心の中にスツと入って来れて、一緒に泣いて、一緒に笑ってくれる人ってなかなか居ないと思う。ユキヤトモちゃんは決してボクの心の中には入れない。この差って一体何だろうね。」

千夏は弥生の答えに聞き入っていた。何か正しい答えを導き出すと必死に焦っていて、弥生の中では一番になりたくて。時に厳し

い事を言ったりもした。そうやってずっと一緒に過ごしてきた。

「弥生、私の知らない所に行かないで。」

「大丈夫。ボクはボクだから。知らない事があつたとしても焦らないで。千夏にはきつと分かるはずだから……。」

弥生の背には夕日が当たり背が小さめな弥生が千夏にはとても大きく見えていた。

それから数日が経った。

「只今電話に出る事が出来ません。ピーっと言う発信音の後に……。」

ガチャ。ツーツ、ツーツ。無機質な音がスピーカーから空しく流れ、主の不在を告げる。弥生は携帯電話を耳から離すとパタンと閉じた。

「おねーちゃん、また繋がらないよ。」

休み時間、弥生は千夏と体育館裏に居た。そして、千夏の携帯電話を借りて弥生は姉に電話をしていた。

「今日で十二回目だね。今ちょうど十時だから、今日と言う日付に入ってから、一時間に一回以上掛ける事になるよ。アンタも良くやるわー。」

千夏は弥生に飽きられ、親以外ほとんど登録の無い新品の携帯電話をカバンにしまった。

ヴーツ、ヴーツ、携帯電話のバイブレーションが鳴った。

「まさか、おねーちゃん?!千夏、早く出して。」

「待って、ちょっと待って。」

千夏は手提げカバンのチャックのチャックに若干手こずり、何とかカバンの中から携帯電話を取り出した。

「ん?!海原さん?どうしてこんなタイミングで?」

「千夏、何で、海原さんと連絡先交換してんの?」

「いや、海原さんとあの後仲良くなっちゃってさ、お母さんクラシックジャズとか趣味だったらしく、聴いたことある曲とかお話し

したら、ぜひ、『連絡先の交換を』って迫られちゃって。」

経緯を若干長めに話している千夏。しかし、千夏の持っている携帯電話は、今留守電モードに入ってしまった。弥生は慌てて千夏にそれを告げ、電話に出させた。

「はい、もしもし。」

声のトーンを一段階高くして電話に出る千夏。

「サイトウです。その声は千夏さん？」

「は、はいっ!! どうなされたんですか？」

憧れのサイトウ君と聞き、千夏のキャラには更に猫が被った。

「そこに弥生さん居る？」

千夏は弥生をちらりと見る。そして噛み付きそうな剣幕で睨んだ後、電話に視線を戻した。

「い、居ませんよ。どうしたんですかー。」

千夏は乾いた笑い声をさせながら、サイトウ君、サイトウ君と電話を続けた。

「うん。大した用件じゃないんだけどさ、今日の放課後、空いたら『ぶっち』に来るように伝えてくれない？」

「あつ、はい。分かりました。時間はどうします？」

「うん、何時でも良いよ。俺、今日は七時まであそこに居る予定だからさ。」

「分かりました。伝えときます。」

千夏はそう言った後、続けざまに切り出した。

「あの、それはそうと、お話しませんか？」

「ごめんね。これ、海原さんの携帯だから。電話長くなるといけないから切るね。」

ガチャ。ツーツ、ツーツ。

「くっそーっ!!」

千夏は黄色い声で嘆き叫ぶと、携帯電話を閉じ、手提げカバンを開いて投げ込んだ。この間およそ五秒。

「どしたのさ、千夏。」

弥生は平和に何も知らないのか、相変わらず抜けた表情をして、千夏に質問をして来た。

「アンタばかり、アンタばかり……。」「

千夏は校舎の壁に手を当て、俯くと呟くように弥生を呪ってみる。しかし、弥生は分からないようで、頭の上に一つあった疑問符が三つぐらいに増えた。

千夏は一息ついて落ち着くと、弥生に用件を伝えた。

「今日の放課後、『ぶつち』に来なつてサイトウ君が言つてたよ。

……それと私も行くからね!!」

そう言つと千夏はすたすたと教室へ戻つて行つてしまった。

「んー、何か分かんないけど、何で千夏の機嫌悪いんだろ。ま、いつか。」

弥生は千夏の背中を健気に追つて行つた。

そして、同日放課後。

「こんにちはー、お疲れ様でーっす!!」

弥生は喫茶店のドアを勢いよく開け、入つて行つた。

「アンタ、他のお客さん居たらどうすんのっ!!」

弥生の後頭部に千夏は勢いよくクロスチョップを決め、弥生は今にも湯気が立ちのぼりそうな後頭部をさすっていた。

「いや、元気がいいのはいいことだよ。クロスチョップ、ナイスだ。」

海原さんは親指を立てて、千夏に合図した。千夏は照れ臭そうにそつぽを向きながら「やり過ぎました」と軽く笑つたけれど。

そして、サイトウ君がホットミルクと紅茶を持って、二人に「まあ座りなよ」とけしかけ、二人は申し訳なさそうにカウンター席に座つた。

「んー、やっぱり冬はホットミルクに限るよ。」

弥生はホットミルクを半分くらい飲んで、マグカップを机に置くと、目を輝かせながら天井を見つめた。そして、ホットミルクに対する情熱を海原さんに語ってみせた。

「で、今日はどうして呼んだんですか？」

千夏はカウンター席から身を乗り出す感じでサイトウ君の目を見入る様に聞いた。

「いや、大した事じゃないんだ。少し長くなるけどね。」

そう言っつて、サイトウ君は話し始めた。

この前さ、心理学の本を買いに隣のデパートまで行っつて来たんだよね。

その日は、少し朝から冷え込む日でさ、俺の学校、インフルエンザが何かで急に休みになっつちゃつて。で、家にいるのも暇だったんで遠くまで足を運んだんだ。

隣の駅前にさ、「トーヨー」ってオレンジ色の看板の大きいデパートがあるんだけどその五階が本屋と服売りのフロアなんだ。そして、俺はインシュタインの相対性理論がたまたま目についたから棚から抜き取っつて読んでたんだ。

そしたら、本棚の向こう側にどうも見覚えのある髪型、顔立ちをした人が世間でよく流行っつている「チヨイワル親父」って言うのかな、そんな風貌の黒いジャケットを着た、身の丈百七十センチちょっとの男性と親しげに服売り場付近を歩いてたんだ。

多分、苑田なんだろうなっつて思っつてさ、ここしばらく苑田とも会っつて無かつたし、服装も若干高校時代と変わっつていたから声掛けづらかつたんだ。でも、弥生さんの事もあつたし、思い切っつて声掛けてみたんだ。そしたら……。

「そしたら？」

千夏、弥生は息を呑んで返事を待った。

ピーッ！それと同時にやかんが音を立ててお湯が沸騰したことを知らせる。海原さんがあわててコンロにやかんを取りに行った。

「苑田だった。」

「本当ですかーっ！」

千夏は、机の上に両手を突いて立ち上がった。マグカップがその振動で激しく揺れる。

「まだ続きがあるんだって。落ち着いて。」

それで、俺はその男性と苑田に軽く会釈して「久しぶりだね」って言うって、少し世間話したんだ。それから今何処に住んでるか聞いたんだよね。

「でっ、でっ、何処だったんですか？」

「千夏、黙って聞きなよ。」

弥生は喰って掛かりそうな千夏を右の手の甲で制し、サイトウ君は話を続けた。

それでね、弥生さんの事を少し話したんだ。「この前会ってさ……って感じで、会う気は無いのか？」って内容で。

そしたら、しばらく黙って、話を変えたかな。お茶を濁したって言うのか。少なくともNOって意思表示では無かったみたいだよ。

「そうですねー。だって、弥生。」

千夏は弥生の背中をポンポンと叩き、励ました。

「おねーちゃん……生きてて良かった。それだけでも良かった。」
弥生は目元に涙を溜める。そしてじわじわと泣き始める。目を両手で覆うが、溢れた涙はホットミルクの中にこぼれ、塩辛いスパイスを加えた。

「今行ったら会えるかもしれないっ！！」

そう言つて弥生は勢いよく立ち上がり、カバンを持って走り出した。

「ちょっと、待ちなさい、弥生っ!!!」

千夏は呼び止めるが、弥生の耳にはその言葉は届かず、ただ弥生は一心不乱、何かに取り憑かれたようにスタミナを気にする余裕も無く駅まで走つて行つた。

取り残された千夏は、店の戸口から戻り、海原さんに「止めるな、行かせてやれ。」と宥められながら、静かに残つた紅茶を飲んでいった。

サイトウ君もその様子を見て、俯いてその事について考えていた。

「着いた。ここだよね。」

弥生は某デパートに居た。息は切れ切れ、咳が止まらず、目元には涙が吹き晒されたのか、泣き跡が塩辛い跡となつて残っている。今にも倒れてしまいそうな位むせ、膝に手を突きながら、浅く小刻みに呼吸を繰り返している。しかし、弥生は自らを駆り立てて、あともう少しとデパートの中に駆け込んで行つた。

そして、五階服売り場

「この前、トーさんと選んで買い忘れた服、なかなか良かったなあ。そろそろ冬になるし、買ってみようかな。」

ある女性は両手に服を持ちながらどちらが良いのかを検討していた。

「あのー、店員さん、どちらがいいと思いますかあ?」

比較的シャイなのか、聴きづらい小声で店員さんに話しかける。しかし、店員さんは気付かず、呼び込みに行つてしまった。

「駄目かあ。しょうがない。」

その女性はまた鏡の前で悩みだした。

「おねーちゃんは真面目で、大人しくて、シャイで、黒髪で、髪なんか染めたりしなくて、背も比較的小さくて、大きくなったら多分こんな感じなんだろうなーってのも予測してた。会ったら何て言おうか。」

弥生は、手に数年前の家族写真を持ち、それを見つめながら、服売り場をうろろ歩いていた。危なっかしく、人にぶつかりそうな歩き方で、周りの人は弥生を避けながら服の吟味をしていた。

「よし、これで行く。」

女性は片方の服を棚に戻し、振り向いて歩き出そうとした。そして、目の前から来た小さな女の子にぶつかった。

ドン。擬音で言えばこんな感じだろう。弥生と女性は同時に尻餅を突き、床に両手を突いている。そして、先に弥生が立ち上がり、女性のもとへ駆け寄って行き、女性の身の安全の確認と謝罪をしに言った。

「あの一、大丈夫ですか？」

弥生は自分の尻をさすり、痛みに苦笑いしながら女性に話し掛ける。

「いえ、大丈夫です。あなたこそ大丈夫なんですか？」

「あ、はい、何ともないです。」

弥生はその場で二、三回跳ねて見せた。そして、弥生は何故かその女性に何処かしら懐かしい感覚があった。声質、髪質、背丈。そのすべてを自らが追い求め、自らが失っていた人物をそのまま大きくしたような、そんな不思議な感覚。

そして、女性の胸元に掛かっていた木彫りのリンゴの首飾りを見て一瞬でその人物が誰か分かってしまった。弥生の中でジグソーパズルの最後のピースがはまる音がした。

「おねーちゃん!!!」

「えっ……弥生?!」

女性は若干焦りを感じていた。

第三章「再開・転機・急冷」に続く。

第三章「再会・転機・急冷」

第三章「再開・転機・急冷」

序曲（再会）

「えっ、どうして弥生がここにいるの?!」

あの日から私は、トーさんと一緒に生活して来た。温かった。しかし、それに甘えれば甘えるほど、実の家族から目を背け、忘れていこう、忘れていこうと彼方へ追いやり、臭い物を封じるように、鼻摘み物として頭の片隅に追いやって行った。

「それ」が別個体で成長し、個々に生きている。それすらに目を向けず、あたかも殺したように過ごしていた。私は酷い女だ。

私は頭を深く抱え、酷く罪悪感にうなされた。「あの日から私は偽に縋って生きて来た」その卑怯さや狡さが心を痛めつける。

「おねーちゃん、ずっと会いたかった。もう離れたくない。」

弥生は、私の懷に飛び込むようにして抱き付いてきた。嬉し泣きなのか、泣きじゃくって昔から変わらない妹の姿に、私は何だか心が癒された気がした。

「アイスクリーム、食べよっか。」

「うん。」

私は、五年分の時間を弥生と過ごしているような感覚だった。店内のアイスクリーム屋のベンチに座り、弥生はレモンとバナナチョコレートのダブル、私はラムレーズンのシングルを頼むと弥生に渡す。弥生は自分の口に入らない、拳より大きなアイスクリームにピツクリしながら、甘酸っぱい風味を味わっていた。弥生は言いたかった事がたくさんあつたらしく、目を輝かせながら私に話していた。私はただ聞いていたのだけれど、姉として妹の相談に乗れたのは純粹に嬉しかった。

「……でねっ、ボクはねっ、……したんだよ。」

「弥生、その『ボク』って喋り方向とか出来ないの？ 仮にも女の子なんだし。」

「これはボクのあいだでんていていーなんだ！」

弥生の奴、アイデンティティーなんて言葉使っちゃって、ホント成長したよね。してしまったと言うのか。

「そう言えばおねーちゃん、ずっと五年もあつてなかったけど、よく飢えなかったよね。どうやって過ごして来たの？」

弥生は純粹無垢な目で私を見て来た。しかし、不意を突かれ、私が思ったのはトーさんの事、それしか出て来なかった。私が言うのも変かも知れないけれど、五年間、トーさんは本当に私と「一定の距離」を保って来た。シロやク口を付けるとするならばグレーで。悪くも無く良くも無いその人に、私は育てられたと言えば弥生はどう思うんだろうか。怒るの？ それとも悲しむの？ 考えるのさえ怖く、私は嘘を吐いた。

「アルバイトしてたんだよ。隣町まで行ったんだけど、そこで電車代切れちゃってさ、行きずりの食堂やってるおばさんに、店に雇って貰ったんだ。そしたらすすごく気に入られちゃって、親元から離れて自立するのも悪くないかなって思って。」

「お母さん心配してたよー。優しいおばさんのいたんだねー。どうして、交通費入った時点で帰ってこなかったの？」

「給料日が一カ月後で戻るにも戻れない状況になってたんだよ。出来過ぎた話だけだよ。」

私は弥生が純粹なのを知っていた。そして敢えて嘘を吐いた。弥生は私の話を信じ込み、アルバイトの大変さや嬉しかった事、理由のこじ付けなど様々な事を聞いて来た。答える度後ろめたさがあった。

私は、弥生はどうして一瞬で私の事が分かったのか逆に気になって来た。

「私から逆に聞くけど、どうして私が見つかったの？」

「うん。それはね、これ覚えてる？」

弥生は羽織っているウインドブレイカ のチャックを下し、首元から木彫りの熊の首飾りを取り出した。

「ここにおねーちゃんの名前が刻んであって、おねーちゃん的首飾りにはボクの名前が刻んであるの。北海道におねーちゃんが修学旅行に行つて来て、アイヌの民芸品をお土産に買つて来たの、覚えてる？」

思い出した。私は自分の首飾りを照明に当ててみる。綺麗に樹脂塗装された木彫りの首飾りは凹凸まで細かく掘られ、とても美しかった。裏には日付とローマ字で「YAYOI」と彫られていて、日付は掠れて読めなくなっている。しかし、妹の名前はかるうじて読む事が出来た。

私はその首飾りを欠かさず毎日付けていた。もともと熊の首飾りを自分用に、リングを弥生の為を買って来たのだが、弥生が駄々をこね、仕方なく交換したのだ。それがいつの間にか「姉妹の刻印」となっていた。

「弥生もよくそんな古い物ずっと付けてたねー。」

「お姉ちゃんこそ。」

そんな他愛の無い会話を続け、私はちらりと壁時計を見た。もう時刻は七時を回っていた。

「あ、もうこんな時間だ。私、行くね。」

私はカバンを持ち、紙袋を持つと弥生に別れを告げた。

「おねーちゃん、もう行っちゃうの？会ったばっかじゃん。もう少し話そうよ。」

弥生は少し物寂しそうに言い、私を引きとめようとする。目も若干潤んでいた。

「せっかく会えたんだよ。ボク、おねーちゃんにまた会いに行きたいし、連れてってよ。帰りは独りで帰れるしさ。」

私は気付くとじりじりと弥生から後ずさりをしていた。そして、意を決する。

「ごめん！！今急いでるから！！」

「おねーちゃんっ！！待ってよ！！」

後ろを振り向くと弥生が追いかけて来ていた。不明瞭さが誤解を生み、誤解が疑いを生み、疑いが執念を生む。そんな負の連鎖が弥生の胸の内では生じていたのかも知れない。少なくとも私にはそう見えていた。追われる者の背中が何と弱い事か。

駅に着き、ICカードで改札を抜ける。弥生は切符を買ったように、若干の遅れを取っていた。

私は一番ホームに降りて行った。そして、比較的前の車両に乗った。弥生もその後ろ姿を見ていたのか、一つ後ろの車両に乗り込んで私の行方を捜している。そこまでして私に会いたかつたんだろうか。

その駅から三駅ほど進んで、私は下車した。弥生は私を見つけたのか、扉の閉まる直前で降り、追って来た。スタミナに感心してしまふ。

「おねーちゃん、お母さん心配してるんだよっ！」

聞こえてくる言葉の一つ一つが心に痛かった。

「おねーちゃん、どうして逃げるのっ！！」

私には会う資格は無い。自分の精神を破綻の底に追い込みながら、私は走った。

角を曲がり、袋故事に入り、泥まみれになりながら、私は弥生と距離を離して行った。そして某アパートに辿り着く。

部屋番号を確認し、その部屋に入ると鍵を掛け、チェーンまで掛けた。窓から外を見降ろすと、弥生が「おねーちゃん！！」と大声を上げながら、見失ってしまった私を懸命に捜していた。胸が痛く締め付けられ、罪悪感や嫌悪感に一人震えていた。寒かった。

「うー、冷え込みなー。おい、雪降ってたぞ。」

この部屋の主、トーさんが帰宅した。あれから時間は三時間経ったようだが、弥生は流石に帰ってくれたみたいだった。可哀想な事をしたかなと何度も思った。もう会わせる顔も無かった。

ここでこの人を切り捨てていけば、私はきつと自由だったに違いない。でも、私の中に刻まれたこの人の存在の強大さは驚くべきもので、弱い心はそれを切ったら死んでしまうじゃないかって思っどどちつかずの道にありながら、私は「トーさん」と「弥生」の二人を天秤に掛けていた。

そう言えば、トーさんは私の事、どう思っているんだろうか。私はトーさんが好きだけど、トーさんは私の事、必要として、大切に思ってくれてるんだろうか。不安になって来た。

独奏曲↳逃走・葛藤↳

それからまた数日が経ち、冬になった。その日は霜が降り、若干冷え込みの激しい日だった。トーさんはたまの休日。私はアルバイトも学校も休みで、久しく家にいられる日だった為、洗濯でもする事にした。トーさんの家で家事をする事だいが経つが、苦になった事は殆ど無い。むしろ、恩返し of 気持ちさえあった。

若干日が昇つて来た為、「洗濯物が凍りつかぬだろう。」と私は洗濯物を洗濯機から回収しに行った。ここんところ、忙しかった為、洗濯物も結構溜まっていた。

私は洗濯物の皺を伸ばし、ぴんと張って干す。若干寒く、エプロン一枚、セーターでは少し物足りなくも感じていた。

「朝から精が出るなー。」

トーさんもベランダに来ていた。私は笑いながら、「数日間家に早めに帰れなかった事」や、「今洗濯物を片づけとかないと駄目だ。

「そんな事を話しながら、洗濯物を干して行った。今日はなんだか寒さで空気が弛緩しているが、私もトーさんも久し振りの休日の為か、若干油断していた。」

「おねーちゃん！ここにいたの？」

下を見ると弥生がいた。ベランダを仰ぎ見るようにして見ていたようだが、若干軽装で、寒そう震えながら私を探していたんだろう。私は弥生のそんな姿に根負けし、トーさんの承諾を得て家に入れる事にした。

「おねーちゃん、探したんだよ！！お母さんもおねーちゃんに会いたがってたんだよ！！こんなところで何してるの？早く帰ろうよ！」

「この女の子は知り合いか？」

「その男の人はおねーちゃんの知り合い？」

私はこうなるだろうなと想定はしていた。しかし、迫り来る質問を捌ききるほど、私は優れた頭を持っている訳は無い。仕方ないので、双方を黙らせ、徐々に消化していく事にした。

「紹介します。私の妹、『弥生』です。歳は七歳離れています。」

弥生は、私の紹介を聞いたのか、戸惑いながら会釈をした。

「あ、初めまして。『苑田弥生』です。」

「よろしく。」

トーさんは一言だけ言っただけで頭を下げた。

「そして、こちらの方は……。」

そう言えば、私はトーさんの名前を知らない。紹介をしようと思っても立場上上手く説明できないじゃないか。職業柄も何をしているのかよく知らない訳だし、「知らない男の人と同棲している。」と弥生は聞いたならそんな顔をしてしまうだろうか。

私は非常に困惑した。しかし、トーさんは私の心を汲んだのか、自分から喋り出した。

「私は、苑田さんの友人の兄で、経済学の研究をしている『栗原(偽名)』と申します。趣味も合ったので、時々私の所に遊びに来

ているんですよ。」

トーさんはそう言って咳払いをした。そして私の方を見た。

私は、トーさんの機転に感謝しても仕切れなかった。

「じゃあ、どうして栗原さんの洗濯物、おねーちゃんが干してたの？」

「それは……。」

「私がルーズだから遊びに来たついでに洗濯物もしてくれただですよ。いつもお姉さんには感謝してますよ。」

トーさんは弥生にそう切り返し、にっこりと笑った。

「……おねーちゃん、帰ろうよ。」

弥生は眉をしかめ、上目遣いで訴えるように言って来た。

「そ、それは……。」

「どうして、そんなに拒むのさ。何か理由があるんじゃないの？ 帰れない理由が。」

弥生は私の心に斬り込んで来た。剣幕と凶星で私の心はズタズタにされてしまいそうだった。

「……………」

「おねーちゃん、理由が無いんだっいたら行くよ。ね。」

弥生は私の手を引き、無理やり外に連れ出そうとする。私は唇をギリツと噛み締め、心で抗った。しかし、思うような良い訳が出ず、ただ引つ張られるだけ。

「まーまー、弥生さんも来たばかりですし、外は寒い。ゆっくりして行きませんか？ それからでも構いませんし。」

トーさんは弥生に笑い掛け、座らせた。私は、今日のトーさんのタイミングの良さに感嘆してしまった。

それから、私はお茶を急須に入れ、お茶菓子を盆に乗せてトーさんと弥生に差し出した後、話を進めていった。私とトーさんは弥生の納得いかない点を上手く消化しながら、納得させながら話を進めていった。

「おねーちゃん、訳あつてここに住ませて貰つてるんだね。それは分かった。やるべき事済ませて早く戻ってきなよ。」

「分かつてるよ。弥生も体に気を付けてね。お母さんによろしく。納得してくれるか分かんないけどね。」

「分かった。それと、おねーちゃん、また遊びに来てても良いかな。」

「いいよ。」

「嘘吐いてたら承知しないから！」

私には、弥生の目が一瞬ぎらついて見えた。私は苦笑いしながら弥生を見送った。そして、弥生は小走りしながら駅まで向かつて行った。

「何か、激しい妹さんだな。お前もそろそろ家に戻るべき時が来たんじゃないか。」

「もう少し、もう少しだけでも居させて暮れないかな。」

私はトーさんにしがみ付き、少しだけ泣いた。

その日の晩、私はトーさんと夕飯の買い物に行った。久し振りに買い物に行ったので、トーさんは近場で済ませようかと話していたのだが、私から、遠くまで行こうと懇願し、トーさんは折れてくれた。道路は込み合っていて、雪も降り始め、視界が徐々に悪くなってきた。私は雪を見ながら何か重要な事を思い出しかけていた。それは弥生の事やトーさんの事じゃなく、何か別の事……。

独奏曲〈悲壮〉

「おねーちゃんにああ言われたのは良いけど、お母さんにどう伝えようか。」

駅のホームで弥生は、母にどう話すべきか悩んでいた。雪のせいか、

電車も若干遅れ気味。

「うう、少し冷えるな。おねーちゃんのとこに長居し過ぎて、雪が降って来ちゃったよ。コインポタージュでも飲むか。」

弥生は震えながら尻のポケットに手をつ突っ込んだ。

「あ、財布が無い！ICカードは手元にあるのに財布忘れて来るなんてボクは何て馬鹿なんだ！！」

弥生は自分の頭をポカポカと殴り、頭を抱えながら自販機に身を預けた。

「おねーちゃん、まだアパートにいるかな。急いで財布取りに行かなくちゃ。」

弥生は駅から出て走り出した。軽装の弥生に降り続ける雪は身に厳しく、自らを戒めているようだった。

そして、アパートに着く。

「おねーちゃん、家にいるかなあ。」

インターホンを押す。しかし、一向に返事がない。仕方ないのでもう一回押す。

「あれ？出かけちゃったのかな。これじゃあ帰れないよ。」

弥生は、その場に座り込んで待つていようかと考えた。しかし、活気旺盛な弥生が待つて居られる訳がなく、弥生は立ち上がってドアノブを捻ってみた。

「開いちゃったよ。どうしよう。」

弥生はおろおろとその場で戸惑い、少し悩んだ。

「いいや、入っちゃえ。ボクは財布取りに来ただけだし。」

弥生は小声で「失礼しまーす」と言いながら忍び足で入って行った。

「財布、財布何処だろう。」

弥生はリビングを探し、机や流しの上を探し、居間に行ってみるが、見つからない。

「やっぱりどっか落としたかなー。あ、トイレ探してなかった。」

弥生は思い当たる所の最後をトイレだと思い、思い当たる部屋のドアノブを捻った。

「うわっ、ここトイレじゃ無いじゃん。でも綺麗な部屋だなー。本がぎっしりだよ。」

弥生が入り違えた部屋は、総計三百冊以上あるかと思われる書齋だった。本は綺麗に整頓され、フローリングは磨かれ、弥生の心を惹き付けた。

本の一冊一冊を手に取って見てみる弥生。

「六法全書？株式市場？FX？難しい本ばかりだなー。」

そして、弥生は机の上に目が行った。そこには使い込まれた銀色の万年筆、カッターナイフ、インク瓶そして、電卓や消しゴムなどが散らばり、中央には二冊の日記帳が無造作に積んであった。

「やけにぼろっちい日記帳だなー。おねーちゃんはこんな日記帳使わないだろうし、多分この部屋は栗原さんの物だろうな。」

弥生は、そのまま日記帳を戻そうとした。他人の日記を読む趣味は無いと。しかし、姉と同居している男性の信憑性もまだ浅く、疑いもあつた為、思い切って日記帳を開いてしまった。

「大したもんじゃなさそうだし、読んじゃっても構わないよね。」

独奏曲へ過去経歴へ

今日は久し振りにアイツの笑顔を見る事が出来た。俺の罪もやっとな償える時が来たかな。

今日は食事に連れてってやった。アイツは楽しそうだったし、親父の顔もあまり思い出さなくなってきた……。

「アイツって誰だろう。そもそも俺の罪って？」

弥生は更に日記に興味を持ち、前の日に遡った。

「あ、この日記飛び飛びに書いてある。この日はおねーちゃんが家出した日だったっけ。」

参った。まさかこんな形でコイツが現れるとは思わなかった。俺が詐欺に合わせてしまった人の娘とこんな形で会う事になるとは。天の思し召しか、罪を悔い改めよなのか。どちらにせよ、俺は死ぬわけにはいかない。

「え、これってどう言う事？まさかまさか……。」
弥生は、更に日付を遡った。

八月三十日。快晴。今日は夏休み終盤。大学の友人達と夏休み終盤だった為、課題を相談し合いながら片付けていた。俺らは夏休み、海に行ったり、女遊びしたりして、散々、金使い過ぎたから、懐加減が大変な事になっていた。それでもふらふらしながらアルバイトもしないで、過ごしてたんだ。そしたら、友人三人の中で一番頭の切れる奴が、「最近、詐欺の事を経済学と関連させて勉強してる。詐欺は石川と荒木と俺が三人組めばやれない事も無い。」って言いだした。こんなことを鮮明に書いておくのも気恥ずかしいのだが。

それから冗談半分に笑っていた話を石川が本気にしてしまい、俺達三人は不動産屋を偽って、適当なサビ残してそうな若いサラリーマンの家に押しかけてったんだ。

俺らは少額掠め取って小遣い程度の額を稼ごうとしていた。しかし、まさか壱千万円も奪ってしまうとは。俺は出来過ぎたこの詐欺に頭を抱えてしまった。

そして、数日後の今日、まさかこんな事になるなんて……俺はもう死んでしまいたい。

弥生は日記のそのページに血染みが出来ている事に気づいた。この人はこの日記を遺書としながら、自殺を図ろうとしていたんだろうか。

「まさか……ね。」

弥生は青ざめていた。手にはじわりと汗が滲み、少し混乱していた。そして、自分の中で整理できない事実を明確にすべく、必死に日記を捲った。

「あ。」

日記の隙間から一枚の煤けた新聞のスクラップがひらひらと舞って床に落ちた。

「あの日の新聞だ。ボクが図書館で見たのと同じ。」

弥生はその言葉を言い終えた後、同時に良く分からない嫌悪感や憎悪感が襲って来るのを身で感じた。「ニクイ、アイツガニクイ」と死神が自分を駆り立てるようではなかった。

「ただいまー。ヤバい、鍵開いてたんだ。」

家の主、トーさんの帰宅。そして、トーさんは何か盗まれているいかとりビングや居間を確認している。

「ここら辺は異常ないな。」

弥生は若干焦った。何故なら自分が不法侵入し、日記を手に持っていたから。しかしそれ以上に、家族を引き裂いた張本人が良く分からない理由で姉と一緒に生活している。それを何とかしなければいけなかったり。色んな感情が交錯した。

「あ、俺の部屋探してないじゃん。」

そして、トーさんは部屋のドアを開け、弥生と目を合わせた。日記帳を持っている弥生と。

「……………」

「……………」

お互い無言。先に口を開いたのはトーさんだった。

「帰ったんじゃないかったのかな。忘れ物かい？そして、私の日記帳をどうして君が持っているのかな。」

弥生は言い訳をしようとした。不法に家に入り、不法にトーさんの書斎に入り、無断で日記を読み、財布も見つからず。そんな不台

理な状況。立ち回りは悪く、どんな結果に至っても言い訳を最低限はしたかった。しかし、弥生の口は本心剥き出しにしてトーさんに斬りかかって行った。

「……」

「え？」

「人殺し！おねーちゃんを、おねーちゃんに何しやがったんだよ！！お父さんを返せ！！」

弥生は日記帳を乱暴にトーさんに投げつけ、部屋を飛び出し、家を飛び出して行った。

そして、アパートの階段。姉は遅れながら買い物袋を持ってゆくりと上がっていた。隣を走り去っていく弥生の姿。

「え？弥生？」

姉が後ろを振り向くと弥生は小さくなって見えなくなっていた。

輪舞曲（rondo）～悲哀～

それから、私は夕飯の支度をするべく、台所に立ち、人参を洗い始めた。

「トーさん、夕飯は肉じゃがが良いよね。」

「ああ。」

私は、野菜の面取りをし、白滝を切り、みりん、砂糖、醤油で味を付けた後、味をしみ込ませる為、弱火にした。そして催したので、トイレに向かう。

洗面所で手を洗っていると、弥生の財布らしき物を発見した。可愛らしい大きな猫の顔が縫いつけられた財布。中には家族の写真やポイントカード、帰りの電車賃など、大切な物がぎっしり詰まっていた。

「弥生、財布忘れてるんじゃない！届けに行かないと！！」

私はその時、どうして弥生を見かけたのか分かった気がした。

「トーさん、弥生が財布忘れたみたいだから届けに行つて来るね。」

「ああ。」

トーさんは無表情で覇気が無く、淡泊な返事をした。

「トーさん、行つて来るからね。鍋、吹きこぼれないように見ててね。」

「ああ。」

私は、トーさんがどうして覇気が無くなったのか心配だったのだが、帰れない弥生の事がもっと心配だった為、急いで財布を届けに行く事にした。

バタン。私は部屋のドアを閉めた。冬空にやけにその音が無機質に響きわたった。

私は走った。弥生の姿を探しながら。私は走った。雪の中を。自分の妹を二度見違えるはずも無い、私にとって大切な妹、それが弥生だ。あんな雪の中、軽装で居る事。それから、風邪を引いて欲しくなかったから、必死に走った。

息を切らしながら駅に着くと、弥生は改札の前に居た。降りゆく雪をポーッと見つめながら、棒立ちになっていた。

「あ、おねーちゃん、来てくれたんだ。あの人と一緒に居たんじやなかったんだ。」

弥生は生気の無い、澀んだ目で笑う。

「弥生、財布忘れてたよ。これないと帰れないんじゃない？」

「いいんだ。ボクはいいんだ。風邪引いたって構わない。おねーちゃんに裏切られたって構わない。もう生きてく気力も無い。」

「アンタ、何言ってるの？」

私は、弥生のその一言一言にゾクツとした。

「ボクはおねーちゃんに裏切られたんだ。お父さんを殺した人と

同居して、お父さんの事忘れて、殺した人を「父さん」って慕って仲良くして。」

「弥生、お父さんを殺した人って何の事？良く分からないんだけど。」

私は弥生が何を言っているのか、さっぱり分からなかった。

「まだ分からないの？おねーちゃんは、おねーちゃんと一緒に生活している人は、お父さんを殺した張本人なんだよ。お父さんは五年前詐欺に遭って自殺したんだ！！その共犯者なんだよ。」

「えっ！！」

私は弥生がどうしてそんな事を知っているのか、分からなかった。弥生は信じ込みやすい節があり、弥生は誰よりも姉想いで、家族想いだ。そんな弥生が今、目を三角にし、激昂している。ここまで怒っている弥生の姿を見たのは初めてだった。

「おねーちゃんはそんな男の人とずっと一緒に住んでて何も感じなかったの？おかしいよ！！何かあるとは思ってたけど、何か唆されたんじゃないの？」

「違う！私とトーさんの関係はそんな浅はかなもんじゃない！！」

トーさんは、トーさんはお父さんを殺してないよ！！」

私はトーさんの事を全否定する弥生を、精一杯泣き叫びながら否定した。

「やっぱり何さ、その『トーさん』って呼び方は。あの人をおねーちゃんに『父さん』って慕いながら生活してたの？ボク達にはお父さんは一人しか居ないんだよ！！いい加減目を覚ましなよ！！」

弥生に怒鳴られ、七歳上の姉はやっと目を覚ました。私は非常に情けなく思った。

「おねーちゃん、分かったんなら、もう帰るよ！本当はあの人殺したいくらい憎いんだけど、それで心が晴れるんならとつくにやってるよ。」

弥生は泣きながら、私の手を引っ張った。

「ねえ、弥生、どうして『トーさん』が人殺しだって分かるの？」

「それは、あの人が描いてた日記帳見ちゃったからだよ。おねーちゃんの所に財布取りに行つて、それで家の鍵が開いてて、たまたま部屋に入つちゃったんだ。そしたら日記があつて……。」

「トーさんの日記見たの?! アンタそれで人殺しつて、随分都合良過ぎない? ハッキリ言うよ。本人の口から聞かない限り、私は信じないからね。そんな嘘つぱちな理由、信じるよりもトーさんに直接聞いた方が早いよ。」

私は弥生の言葉が信じられず、家に引き返して直接聞く事に決めた。

「おねーちゃん、帰らないの?」

「やる事が出来た。弥生も来て。トーさんから直接聞いた方がアンタも納得行くでしょ。」

私は、ごちゃごちゃ言つてる弥生を引つ張つて家まで向かつて行つた。

家に着く。時刻は既に九時を回っていた。トーさんは家におらず、鍋の火は消え、リビングには静かな雪の降る音と寒さが虚しく残る。私は、その場に立ち尽くしていた。そして書斎に弥生が日記を取りに行こうとした時、私は机の上に手紙が置かれているのを発見した。

同居人のお前へ。

弥生さんに俺の素性がばれ、生きていく気力もなくなったので、

湾で死にます。

俺の知れなかつた過去をここに記しておきます。

俺は小さい頃孤児院で育つた、身寄りの無い子供でした。

そんな子供だったからこそ、両親や兄弟への愛情は妬ましく、大人になつてもそれは変わりませんでした。

俺がお前さんのお父さんを殺してしまったのは、大学生の頃でし

た。

俺には、神谷と石川と言う友人が二人居ました。神谷は人一倍頭の回転も速く、世論に対して不満を抱いているような、そんな難しい男でした。悪だくみもし、その気になれば世界征服をしてみえるようなそんな男でした。

もう一人の石川は純な奴で、思い込みが激しい奴でした。俺はその三人で、大学の夏休みの最中、お前さんの親父さんに架空の不動産を売りつけて一千万を騙し取りました。神谷が冗談半分に、「俺らが三人組めば、詐欺なんか余裕でやれる。」と言ったのを口火に、思い込みの激しい石川が便乗、俺も仕方なく参加する事になったのです。

神谷は老人を狙わず、若年層の働き盛りのサラリーマンなら不動産は買ってくれるだろうと言いました。俺は最初は相手を畏に掛け、お金を掠め取る行為に抵抗があつたのですが、家族が憎くなり、止めもせず計画を実行してしまつたのです。

計略は省きますが、計画はあっさり成功し、俺達三人は一千万円と言う大金を手にする事に成功しました。

しかし、神谷と石川は俺が孤児院育ちの家庭環境や貧しい事を知り、自分らは百万ずつ取つて、俺に八百万回してくれたのです。

しかし、所詮この金は血染めの金。俺はその重さと罪悪感に三日三晩うなされていました。一時は死のうと思つたくらいでした。

そして、気付けば手首を切っている事が多くなつていました。

毎日毎日、枕元で親父さんが囁いているような気がし、自傷行為に苛まれ、気が付くとお前さんのお父さんが亡くなつたと言う事を聞きました。

それを聞いた俺は青くなりました。

俺は大学を中退し、街をふらふらと歩く事が多くなりました。肩をぶつけられ、喧嘩を売られる事も多く、その腹いせに怪我の賠償金をせしめる事も多くなり、俺の懐は暖かなくなっていました。しか

し、一向に心は晴れる事はありませんでした。

聞いた話によれば、大学に籍を置いていた神谷と石川はその後に逮捕され、残された俺一人、自首する勇氣も無く、自殺する勇氣も無く、ふらふらと歩いていた時、会ったのがお前さんでした。俺はその行為を神の思召しだと受け止め、お前さんに有り金全部はたいて進学させ、一緒に生活する事に使って行きました。

そして、俺がお前さんのお父さんを思い出さなくなり、段々と罪の意識が薄まって行ったと思っていました。そんな時、お前さんの妹が現れたのです。俺の罪が妹によって伝えられ、きっとお前さんは憎悪感を抱いて俺を悲しい形で裁くでしょう。その前に俺は死にます。

そして、詐欺をしている時に分かってしまったお前さんの名前、父親では無いけれど、父親として呼ばせてくれ。鈴香、今まで本当に楽しかった。ありがとう。

荒木浩輔トイキより。

「トーさん！！死んじや駄目！！」

私は外を出てトーさんの車を確認した。しかしトーさんの車は無かった。

「おねーちゃん、分かったでしょ。行こうよ。」

「弥生、アンタも来て。一刻を争う事態かもしれない。」

私は冬の海で思い当たる節があった。トーさんは冬の海が大好きだと言う事を。一回海釣りに連れて行って貰った事がある。全然釣れなかったが。外は真つ暗で冷え込みも激しかった。

私は懐中電灯を手に持ち、必死に走った。

「弥生、走るよ！」

私は港へ向かった。間に合わないかも知れない。それでも走った。大切な人を守る為に。

そして、やっとの事港に着いた

周囲を懐中電灯で照らす。すると、トーさんらしき人が港の周りを歩き、まるで死に場所を探しているようだった。

そして、トーさんは深呼吸をして海へ身投げをしようとする。

「やめて！！トーさん！！」

「え、お前来たのか？！」

「トーさん、死なないで！！」

私はトーさんに泣きながら必死にしがみ付いた。

「手紙読んだら？俺はもうお前に合わせる顔なんか無いんだ。」

トーさんはあくまでも気持ちを変える気は無いらしい。

「おねーちゃん、そいつは死んで償おうとしてるんだよ！！止めなくてもいいよ！！」

弥生は冷酷に言い放ち、更に凄まじい剣幕で言い寄った。

「トーさんだか誰だか知らないけどね、ボクにとつてお父さんは一人、おねーちゃんも一人。掛け替えのない家族なんだ。誰にも代えられないし何物でもないんだ。それだけ、誰かを失うのは重い事なんだよ。死んで当然だよ。」

「弥生、そんな言い方無いでしょ！」

「そこまで言っても分かんないの？その人もおねーちゃんがいなければ死んでたのに。ボクが海に突き落とした方が早いのかな……。それとも……。」

弥生が壊れた。半狂乱になり、何を言っても聞かない。目が澱んでいる。精神的に抱えている傷が深く重いのか、私はその状況を作り出してしまったのが、凄く辛かった。

そして、弥生はカバンを探ると、刃渡り十八センチはあるかと思われる出刃包丁を取り出し、刃先をトーさんに向けた。

「弥生、そんなものどこで手に入れたの？しまいなさい！」

「どうだっていいじゃないか。おねーちゃんは、おねーちゃんです。いつまで経ってもその人かばってるし、ボクは、ボクが出した結論

はその人を殺さないと言われたい。おねーちゃんがその人から離れないから、ボクはその人を殺す。」

そう言っただけで、トーさんに刃物を向けて走ってくる弥生。トーさんはトーさんで、「ここまで言われたのなら、死んで償うしかない。」と弥生の前で仁王立ちになる始末。私はこの状況を止める術がなかった。もう、仕方がない。ここまで来てしまった亀裂は無理をしても繋いでみせる。

ザク。鈍い音がした。弥生が突き刺したのはトーさんの心臓では無く、私の脇腹だった。気がつく前はトーさんをかばっていた。

コートに血が滲み、滴ってその傷の深さを痛々しく物語っている。

「やめなさいって言うてるでしょうが!!」

「おねーちゃん……ん？」

「お前……。」

弥生とトーさんは目の前に現れ、包丁を突き刺された私に茫然としている。

私は軋むような激痛に顔を歪めながら、二人の大馬鹿に叱咤した。

「死ぬとか死なないとか私には分からない!!それで解決しよう

とかお父さんと一緒じゃん。卑怯だよ。」

私は泣きながら訴えた。

「おねーちゃん、どうしてそいつをかばったの？」

おろおろしながら、私に聞いてくる弥生。

「そうだよ。俺をどうしてかばったんだ？」

トーさんもトーさんで分かかっていない。

「弥生、一つだけ言うよ。悪い人がどうして悪い事をするのか。

それを考えた事ある？例えば物凄くお腹が空いて死にそうな子供が居て、パン屋から一切れのライ麦パンを盗んだ。その店主は子供を探し出して、棒であざが体中に出てくるほど殴った。それと同じ事をしてるのよ。罪は魔が差してやるもの。罪を罰するにはそれなりの重さがある。死は極刑。今のトーさんにそれを背負える資格は無いわ。」

私は脇腹を押さえながら、弥生に必死に訴えかけた。

「それからトーさん、私はどんな事があっても、トーさんは悪人に見えなかったよ。生活の中でトーさんが見せてくれる『笑顔』。間違いなくホン……ノ……ね。」

私は薄れゆく意識の中ゆっくりと目を閉じた。トーさんは私を抱きかかえ、泣いた。私にとってそれは最初で最後のトーさんが見せる純粋な愛情だったのかも知れない。

「鈴香あー!!」

トーさんの泣く姿を弥生は泣きながら見つめ、トーさんの事を根っからの悪人では無いと分かったらしく、弥生はそれ以上攻撃してくる事は無かった。何もせず、ただ必死に私に謝っていた。泣いていた。

……終章に続く。

終章

終章

気が付くと私は病院に居た。刺された脇腹には包帯が巻かれ、まだ若干ずきずきと痛む。

「荒木さんって方が、救急車と警察呼んだらしいわよ。で、赤沼さんが荒木さんと弥生の取り調べを今してるとこよ。アンタは久しくあつたと思えば大怪我して帰って来て、何してるのよ！」

「お母さん……久し振り。」

私は抜けた表情で苦笑いしながら、お母さんに挨拶した。

「全く、久しぶりじゃないよ！アンタは五年も家飛び出して連絡もしないで……。」

お母さんは私の頬にビンタをかまそうとした。私は目を瞑って構える。しかし、攻撃が来ないと思ったら、お母さんは泣いていた。

「……こんな馬の骨、どっか行ってしまえばいいんだわ。」

お母さんはそう言ってそっぽを向き、リンゴを剥き始めた。

「全部弥生から聞いたよ。荒木さんって方に五年間お世話になって、その人はお父さんを詐欺に遭わせた人なんですよ。それで、罪を償う為にスズを育てたって話。」

私はそこまで知られてしまい、かなり気まずかった。

「私は本当は荒木さんが憎いよ。弥生もまだそう思ってると思う。でも、精一杯、スズに向き合ってくれて、精一杯罪と向き合ってくれて。私はその気持ちで十分だよ。」

お母さんは、リンゴを六つに切り分けると、私の前に置いた。

「スズには話して貰いたい事いっぱいあるんだからね。せめて五年居なかつた分、五年分の親孝行をしなさい。」

「お母さん……。」

不覚にも私はその言葉に潤んでしまった。

「弥生はどこに居るんだっけ？」

「さつきも言ったでしょ。赤沼さんのとこ。スズのお腹刺しちゃった件で取り調べ受けてるよ。歳が歳だし、スズもこうして生きてるから、そのうち帰って来るでしょ。」

お母さんはそう言いながら、フルーツナイフをハンカチで拭いている。

「あの子は本当にお姉ちゃん思いでね、スズ刺した時、『おねーちゃん死なないで!!』って泣き叫んでたらしいよ。」

「弥生……。」

私は弥生に本当に悪い事をしてしまった。

「只今、臨時ニュースが入りました。今から五年前の八月三十日、不動産詐欺を犯行した大学生三人組の最後の一人が、遂に逮捕されました。」

「昨夜未明、町、湾から警察署に電話があり、電話を掛けたのは荒木浩輔被告人でした。」

「荒木被告は当時の事件については何も言っていなかったのですが、一言だけ、釈放されたらアイツの元に会いに行つてやりたい、その家族にも謝りたいと話していたようです。」

「警察では、このような好青年が詐欺事件を起こしてしまう事は嘆かわしい。詐欺の無い世の中にしていきたいものだと話していました。」

「トーさん……。」

私はテレビを見ながら、トーさんがいち早く釈放される事を祈った。

数力月後。

「お前さんもこの所ともお別れだな。出所してやりたい事はあるか？」

「アイツに会いに行く事です。」

「頑張れよ。門出祝いに花でも買ってきな。」

刑務所所長は「その男」にお札を握らせ、背中を押しだした。

「……長かった。本当に。」

男の門出は快晴だった。背中から春の暖かい風が後押しする。生きる気力を貰ったその男は走って行った。大切な家族に遭う為に……。

完。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5655i/>

「蒼白の月夜」

2010年10月28日04時18分発行